昭和三十七年十一月

早稲田大学創立八十周年記念

台湾遠征報告書

早稲田大学ワンダーフォーゲル部
稲門ワンダーフォーゲル会

大覇尖山直下にて

早稲田大学創立八十周年記念

台湾遠征特集

目次

台湾遠征に当りて……神沢惣一郎……1
遠征を終えて……渡辺栄太郎……2

遠征報告

一、主旨並びに方針……山本稔……7
二、編成……9
地図Ⅰ……10
地図Ⅱ……11
三、行動記録
A本隊……13
B平地隊……30
行動表

四、反省

総括的反省……吉良洋二……43

各係反省

1 食糧係……斎藤幸太郎……44

2 装備係……浮田陽右……49

3 医療係……橋本孝子……55

4 気象係……塚崎義樹……59

5 記録係……並木睦枝……65

6 写真係……熊谷辰二……65

7 コース係……佐々木惇……67

8 渉外係……木村和巨……68

9 会計……富井道子……69

遠征に寄せる

スイスに於ける或休日……芳野武雄……73
早大ワンゲルの旗をかざして……川崎隆章……74
遠征雑感……里見昭二郎……76
出発までのこと……山口純一……78
所感……福井正吉……79
食べもののこと……並木睦枝……80
遠征への歩み（表）……82

台湾遠征にあたりて

神沢　惣一郎

今度の台湾ワンデルングは、わが部が創立されてはじめての海外遠征であったが、われわれが予想していた以上の成果を収めて帰ってきた。参加された諸氏はもとよりのことであるが、部関係者一同の深い喜びである。

最近の海外渡航熱にのって、渡台する人達もかなり多いようであるが、しかしわが遠征隊の人達は、台湾の各都市をまわり、要人達と交歓し、新高山に登って帰ってくる、というような、ことをせず、あくまでも、質実な、ワンダーフォーゲルの高い精神に即し、大覇尖山の如き、われわれには余り知られていない未開の広大な山野を選び、壮快な跋渉を試みてきた。また、その先々において、終始、台湾の人達の歓迎を心から感謝しながらも、その厚意に甘えることなく、謙恭にして高い節度を持してきた。わたくしは、何にもまして、この隊の、慎ましいが、英雄的な精神に対し、深い敬意を覚えるものである。

（筆者は現部長　商学部教授）

遠征を終えて

団長　渡辺　栄太郎

われわれは遂に親善を目的とする外地訪問の夢を可能ならしめた。思えば早大ワンダーフォーゲル部が体育局の監督下に正式に編入された才一年度の始めから、私はこの部に外地訪問を是非とも実現させたいと思っていた。それから十年たった昨年やっと、機熟してあのような壮挙が可能となったわけである。初代部長をつとめた私にとっては、そんな関係上このことは誰にも負けず喜んだ次才である。

ところで、私に団長になってくれと神沢部長に頼まれた時は、原則として部長が団長になるはずであるから私は辞退したが、神沢部長は非常に忙しい学生部長という職につかれた直後のため、三週間以上も留守には出来ないとの理由で、私に是非にと頼まれた。部からしばらく遠ざかっていた私はメンバーをしらべてみた。隊長、副隊長、OGなど私が部長をしていた当時の人々であり、統卒的力も十分にある最優秀なメンバーであった。それに又勤めの都合上、遠征には参加はしなかったが有力なOBからも是非にとすすめられて、私はこの大任を引きうけた。

帰ってきた時と、又それに引きつづき何回か開かれた会合で、神沢部長から予期以上の

成果をあげてくれてありがたいと感謝の言葉を戴いた。本当にそんなに感謝されるほど立派にやり遂けたか否かは、もう少し時が経たないとわからない。われわれの遠征完了に引きつづいて、軟式庭球部に野球部が行くから、後指をさされるような行為又は印象をわれわれが残して来ていたら、それは必ずわれわれ自身の耳に入って来る筈であると思った。さて今日は二月九日、これだけの時間の経過があってやっと今、本当に無事にやり遂げたのだなという実感がわいて来た次才である。この記を書きながら、隊員一人一人によくやってくれてありがとうと、繰り返し、繰り返し私は心の中で犒の言葉をのべている。

大覇尖山方面に出発する山本隊長以下九名を台北車站に見送ったのは、十一月十二日午前九時十分であった。二日目の十四日には七十年に五回位の台風が、南方海上に発生してこの季節はずれに台湾の中央部に直進してくるという報せが出た。これが来ると、本隊の通過して行く山の中のルートでは避難のしようがないから、どこか安全なところに停滞させなければいけないからと台湾山岳会の方が忠告に来てくれた。台湾では山地に入る場合、官庁発行の正式の入山許可書を携行しなければならないので、どこどこの蛮社を何日何時に通過したかしないかなどを、台北にいても警察電話で一応たしかめることが出来る。これを利用して本隊の通過地点を予定表に従って連絡してみたが、その時は不成功に終った。それでもいよいよ台風の接近が確実となればどうしようかと思って実に心配になって来た。ヘリコプターはどうしたらチャーター出来るかとも真剣に考えた。一人の怪我人も絶対に出してはいけないというのが私の常日頃の信条なのだ。だから遭難など絶対にあってはいけない。万一あった場合は、責任者はよく辞職しておわびのしるしとするが、責任者の辞

職で遭難者は生き還るものではない。だから遭難者が出るかも知れないというような処への計画は、学校スポーツにおいては絶対に考えの対象としてはいけないと私は思っている。さてどうしようかと心配していた十五日の朝、台風は台湾をそれて行く公算が大となったとの公報を得て、本当に救われたような喜びを感じた。そうして安心して、われわれ平地班は各地の校友の訪問旅行に出発した。

台湾の校友は、われわれを非常になつかしがって大歓迎をしてくれた。

終戦直後、台湾の町で台湾人同志が日本語で話していると取り締りをうけたそうだ。お巡りさんは大陸から来たいわゆる外省人で日本語を知らないから、何を話しているのかわからないので気持も悪かったのだろう。又こういう例も見た。お父さんは裕福な早大校友でお母さんも日本の学校に長い間いた人で、日本語はこの二人にとっては決して外国語という語感を持っていない人たちで、子供が七、八人で、一番上が今年大学一年程度の年令であったが、その子供さん達は誰も一語も日本語を知らなかった。おそらくこの子供達の多くはアメリカの大学に行くだろう。更に又、もう五十年もすると台湾には早稲田大学の校友はいなくなりますよと、おどかされた知事さんの言葉も思い出す。今よりもっと多くの留学生が台湾から来るようになってほしいと私はねがわずにはいられない。

（筆者は顧問　商学部教授）

遠征報告

主旨並びに方針

隊長　山本　稔

一、主旨

台湾遠征は現役部とOB会による合同の成果であり、早稲田大学八十周年記念事業の一環であった。

招聘が中華民国台湾省山岳協会であり、日華親善という重要な意味があった。

従って我々には台湾山岳地帯に於けるワンダリングを通じて、両国の親善に寄与する事が目的であった。

二、行動計画

本来は全隊員が親善旅行のため、各地を巡歴すべきであったが、日程が足りず、平地班の力に依頼することとなった。

現役主力の実力を遺憾なく発揮出来る縦走班と、女子を中心とする班の二班に分け、行動する案が検討せられたが、外地に於て隊を充分に掌握する意味からも、私は其の中間を採り、一本とする縦走ワンダリングに決定した。

女子を含めた縦走ワンダリングは多人数でもあり、行程に無理があってはならないし、又、不慮の事故の際の変更を充分に企図する必要があった。

我々は派手な成果を挙げるより、地味な、より着実な方法に努力を続けた。

三、隊員

隊長を不肖私が引受ける事になり、隊員を選ぶ事となった。私の主義を守り、隊としてのまとまりを持つメンバーを得るために、相当の日数を費した。

現役、OB、合同の意味相からも、現役に少し荷重をかけて、約半々というラインを打出した。親善という意味からも是非女子を加え、多い様だが、パーティーは十一、二名は必要であった。

現役の間では、各学年毎に隊員を出したい希望であったが、私は長く部に尽し卒業して行く四年部員等の実力を買いたかった。従って三年部員からの隊員は二名だけとなった。

OBの隊員は、仕事の都合で仲々難しい問題であったが、OBの方々の推薦の中から決定した。

四、編成

団長は我々の代表として総てを統括し、責任者として其の任を完遂して下さった。

私は当初、副隊長を設ける事とし、部の総マネージメント的性格で渉外、連絡、会計等の広範囲の責任を依頼した。非常に繁多を極め、殆んど自己の時間もな

かった様な情況で、其の任を果して戴いた事に恐縮している。

各担当係の分担は、己々の長所を生かして決定したつもりである。

内地との連絡は、献身的に動いて戴いている事務局による事とした。

五、資金計画

食糧や装備等で色々に御協力を戴いたが、我々としては、大学のアマチュアスポーツの部である性格から、進んでスポンサーを捜したり、後援を依頼したりする事なく、極力自力で進んで行くとの方針をたてた。

多くのOBの方々の寄附に、強い力を得た次第である。

絶大なる友情により支援して戴いた我が隊は、極力経費を節減し、しかも立派な成果を残す為、色々検討を続けた。

六、隊の統制

隊員全員が相互に心から打融ける事が、最も大切な事であった。研究会を重ねる毎に、親しさを増したが、私達も、団長以外は全員船便に変更し、船中で各人の個性を充分に見る事が出来たし、より一段の融和を得る事が出来た。

隊行動に於て、命令は絶対的であり、和合があってこそ統率は守られる。隊員一人一人の努力に、敬意を払いたい。

終りに、我々は至らない処が多く、御期待にそむく事も多かった事と存じますが、温い愛情を下すった内外の諸先輩に心からの謝意を表したいと思います。

食糧　斉藤　幸太郎　第一政治経済学部四年

コース　佐々木　惇　第一文学部四年

気象　塚崎　義樹　第一理工学部三年

医療　橋本　孝子　第一文学部三年

事務局

事務局長　里見昭二郎　早稲田大学外事課

山口純一　山口部品株式会社

二、編成

遠征隊員

団長　渡辺　栄太郎　早稲田大学教授

隊長　山本　稔　西川建設株式会社

副隊長　吉良　洋二　東京発動機株式会社

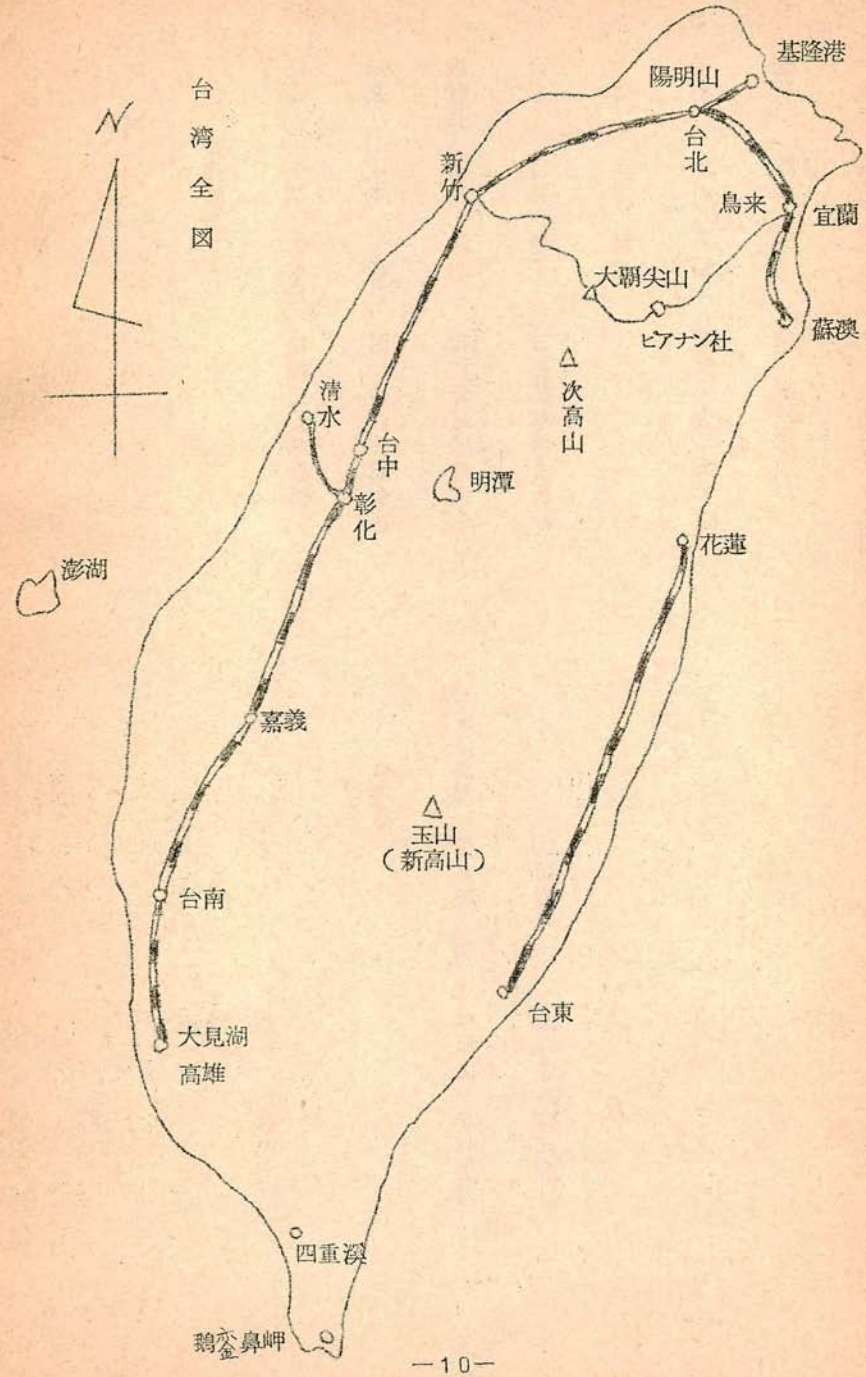
会計　富井　道子　日興証券株式会社

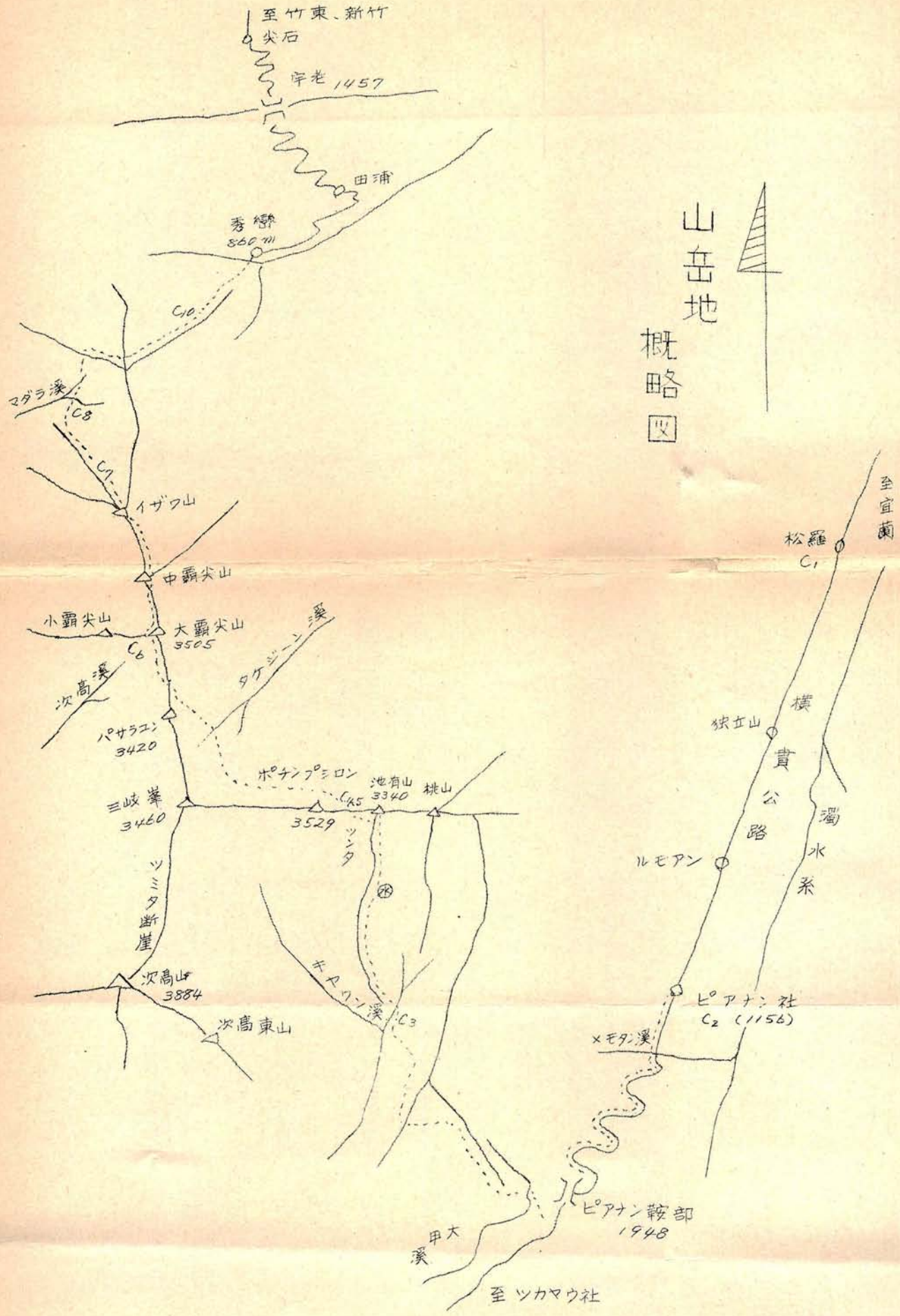
記録　並木　睦枝

渉外　木村　和巨　早稲田大学大学院

装備　浮田　陽右　第一商学部四年

カメラ　熊谷　辰二　第一政治経済学部四年


台湾全図
N
基隆港
陽明山
台北
新竹
烏来
宜蘭
大覇尖山
ピアナン社
蘇澳
△次高山
清水
台中
明潭
彰化
澎湖
花蓮
嘉義
△玉山
（新高山）
台南
台東
大見湖
高雄
四重溪
鵝鑾鼻岬


山岳地概略図
至竹東、新竹
尖石
宇老 1457
田浦
秀巒 860 m
C10
マダラ溪
C8
C7
イザワ山
中霸尖山
小霸尖山
大霸尖山 3505
C6
次高溪
タケジーン溪
パサラユン 3420
ポチンプシロン
池有山 3340
桃山
三岐峯 3460
C5
3529
ツンタ
ツミタ断崖
次高山 3884
次高東山
キヤウン溪
C3
甲大溪
至ツカヤウ社
ピアナン鞍部 1948
ピアナン社 C2 (1156)
×モタン溪
ルモアン
狩立山
横貫公路
濁水系
松羅 C1
至宜蘭

三、行動記録

A、本隊

十一月一日

ビザ待ちのため、出発の準備を整えて山口OBの会社に正午に集合すると、待ちに待ったビザが下りたとの連絡が中華民国大使館に詰めていた木村コーチより入る。嬉しさよりも、なにかほっとした感じが皆の顔に現われている。

関係各方面に今晩出発の旨連絡し、二十時三十分東京駅に向う。関係者の方々、諸先輩、現役等大勢の皆さんによる校歌に送られて一同元気一杯、神戸に向けて出発する。

十一月二日

八時、神戸三宮駅に到着。先発の里見監督をはじめ関西支部の諸先輩に迎えられる。駅より直接同和海運の事務所に行って、船の切符等の手続を済ませ、次いで神戸入国管理局に行き出国手続を済ませる。船の出港が天候と荷積の都合で五日に延びてしまったので、それまで関西支部の方に宿舎を提供して戴くことになる。夕方、大阪に場所を移して、関西支部主催の歓送会に出席し、懐しい諸先輩に再会する。九時過ぎ席をひらき各々宿舎に引きあげる。

十一月三日

午前中雨。今日は各自思い思いに夕刻まで関西の町を散策し、十七時同和海運主催のパーティーに出席する。

十一月四日

今日も各自適当に時間をつぶして、十七時同和海運に集合。荷物を持って神戸税関に行き通関手続を済ませる。簡単な検査で難なく通過する。十九時全員で夕食をとり、乗船まで時間が空いていたので六甲山の前衛、摩耶山展望台に上り、神戸から大阪へ連なる素晴らしい夜景を眺める。二十三時、船に戻り、明早朝の

出港なので今夜は船に泊る。船底の物置きみたいな部屋だが、我々にはかえって気楽だ。

十一月五日

甲板に出て体操をすませ七時半船で朝食をとる。八時四十分、いよいよ出港だ。里見監督をはじめ、諸先輩、それにお世話になった同和海運の片山氏等に見送られて、気持良く晴れわたった神戸港を離れる。六甲の山々が遠くなるにつれ、やっと遠征に出発するのだという実感が湧いて来る。台東輪とという我々の船は二千余トンの小っぽけな、おまけにすごくおんぼろなバナナボートなので猛烈に揺れるのではないかと心配したが波もなく穏やかな海に、全員元気で甲板に出て日向ぼっこ等して一日のんびりと過す。紀伊水道を南下して足摺岬の灯の見えるころ陽が沈む。

十一月六日

六時半起床し、甲板に出て元気一杯に体操する。今日から計画表に従って行動を開始する。午前中は軽い柔軟体操で体調を整える。午后は船長の案内で船の中を見学する。操舵室ではわざわざレーダーを動かしてくれ、のぞいて見ると丁度種子島が映し出されていた。二日間も走ってまだ日本を離れないとは、日本も意外に広いものだ。

十一月七日

天気は相変らず素晴しく良い。一夜明ける毎に暖かくなり、日中はランニングシャツ一枚で充分だ。台湾での暑さが思いやられる。午前中に各係の台湾上陸後の予定を検討する。昼頃、イルカが数匹船にならんで跳ねあがりながらしばらくついて来たり、飛魚が船の周りを飛び交って、退屈をまぎらしてくれた。今日は日本と台湾の中間あたりを走っており、一日中島影一つ見えない。

十一月八日

昨日とうって変り、終日雨が降ったり止んだりで海も荒模様。台風が接近しているとのことだ。

十四時基隆港入港の予定なのでパッキングや、荷物の整理を行うが、向い風のため船足がおそく、十七時近くやっと台湾の島影が見え始めた。入港が税関の締切り時間を二十分程おくれた為上陸出来ず、もう一晩海の上で眠ることとなりがっかりする。検疫官等がボートでやって来た。基隆港の夜景は国際港としては

灯りも少なく淋しいものだ。尚、渡辺団長は羽田より飛行機で出発し、既に着いていられるとの連絡が入った。

十一月九日

八時、ようやく接岸する。雨がしょぼついて淋しい感じの港だ　陣笠みたいなものを被った、裸足のクーリー達がうろうろしている。台湾省山岳協会の余初雄・林幸珠さんや渡辺団長等が出迎えて下さる。税関での荷物の検査は一人だけ徹底的に調べて、あとは簡単に通る。山岳協会でチャーターして下さったバスで台北市に向う。台北駅近くの宿舎、富国旅社に荷をおろして、ＹＭＣＡでの山岳協会主催の歓迎パーティーに出席する。

ホテルで一風呂浴びて落着き、夕刻、早稲田の卒業生の会である同学会の歓迎パーティーに出席する。会員の方々は皆かなり年輩で話がうまくつながらなくて困ったが、とても親しみの湧くのは、ともに同じ学園に学んだ故だろう。円いテーブルを囲んで広東料理をつつきながら、なごやかな会ではあったが、乾杯攻めにはとてもたまらず音をあげてしまった。

十一月十日

小雨模様のなかを、富井、木村両隊員は金のエクスチェンヂに、他の隊員は山岳協会の方に伴われてマイクロバスで台北市政府（日本でいう東京都庁のようなもの）を訪問し、周百練市長兼山岳協会会長に訪華の挨拶をし、記念にペナントを贈呈する。　次いで、珍らしい風景を車窓に見ながら日本大使館へ行き、大使に我々の予定を報告し、ペナントを渡す。市内のメインストリートはヤシの並木が美しく連なり、いかにも南国らしい風景だ。　空いた時間を利用して市内の竜山寺というかなり有名な古い廟を見に行く。　金ピカで、ゴテゴテした彫刻のほどこされた、異様な感じを受ける建物だ。再び車に乗って、中国の青少年の活動を統括しているという、中国反共青年救国団を訪問し、幹事の方々と歓談し、その活動内容等をフィルムで説明してもらう。ペナント贈呈。　又、体育会事務所に謝国城氏を訪ね、台湾のスポーツの現況をうかがう。

スポーツは各種にわたってなかなか盛んであり、特にバスケットボールは国技とされているとのことだ。

各方面への挨拶を終えてホテルへ戻り、皆で昼食を食べに街の食堂へ出かける。　中国語ならまかしておけという佐々木隊員の怪しげな通訳を交えて、なんと

か適当に分ったつもりで注文すると、結構うまいものが食べられたので安心した。　量が多くて、日本では高級料理に属するようなものが大変安く、おまけにうまいのだから申し分ない。　午后は自由なので市内をぶらつく。商店街は赤や黄の原色の看板がやたらに多く、道路には輪タクが右往左往し、終戦直後の日本の新宿や渋谷辺りの感じによく似ている。　又、バナナ、パイン、オレンヂ等良く熟れた、みるからにうまそうな果物を山のように積んだ屋台がいたるところに見られ、若い隊員にはたまらない魅力だ。

夜、現役隊員はゲテモノ食いに行こうと、渋谷の恋文横丁に似た、食物屋の密集している円環へ勇んで出かけたが、蛇等がニョロニョロしているのを見てなんとなく不安になり、結局焼ソバや、チャーハン等を食べただけで引上げてしまった。

十一月十一日

昨日まで殆んど落つく暇もなく動いていたので今日一日は休養日とする。　各自、各係で明日からの山行の準備にとりかかる。　ポーターのいる蛮社まで運ぶ荷物が一人当り十二、三貫もあり楽じゃない。

山行のコースも山岳協会と再検討して最終的に決定し、山行メンバーは山本隊長以下八名、台湾山岳協会から、王雲郷、林天祥、林幸珠の三名の方が同行して下さることになり、都合男子九名、女子三名の十二名の編成となる。一方、平地行動は渡辺団長、吉良副隊長、並木隊員の三名と決定した。

隊員は日本出発以来満足なトレーニングをしていないので、体のコンディションが気遣われるが、待ちに待った山行に明日は出発とあって元気一杯、ファイトがみなぎっている。

午后、山本隊長他四隊員は訪日友好登山隊の団長だった蘇梅耀氏に招かれて、反共青年救国団の一組織である、青年宿舎のような施設を持つ台北学園を訪問し、施設を見学し、そこから車で台北市郊外にある南山廟という、山腹に城塞のようにそびえ建つ大きな廟を見に行く。　廟から下って蘇氏の友人の家に招かれて本物の台湾料理を御馳走になる。関東料理や四川料理に比べて、みてくれは悪いが、フカのヒレ等をふんだんに使った贅沢な、味の素晴らしく良い料理だった。

明日は朝九時に台北駅を出発なので今夜は皆早々に床につく。

十一月十二日

愈々山へ向って出発。山岳会の方々の盛大な見送りを受けて宜蘭へ向う。宜蘭はかなり賑やかな街だ。台北の様な高層建築はないが田舎しみさに親しさがある。我々はここで野菜や肉類の買付けに市場へ行ったが雑然とした賑いはいかにも東洋的である。はだしの多い街の人達はとても気やすくて、かなり明瞭な日本語で話しかけて来る。「日本人の兄貴」と呼び止められるのには参ったが、予定の買物も順調に済み、山盛りの荷物と共にバスに乗り込む。宜蘭は今雨期で、雨の為横貫公路が崩れたらしいが、行ける所迄乗って行くことにする。一時間一寸するとバスが止った。全くついていないとボヤキながらバスを降りる。濁水系の河岸で不気味な灰色の流れを眺めていると、いささが不安な気もするが、ともかく歩かねばならない。道は中国の誇る横貫公路故歩き良いことは歩き良いが、十三貫もの大荷物では十分も歩くと汗の出る難行だ。

松羅なる蛮社に着き一応此処に幕営することにし、交渉隊を派遣してトラック便を待つことにする。

蛮社には十七年ぶりに日本人が来たとのことで、非常になつかしがり、夕食を摂る我々のまわりに坐り込んで、真暗になっても動こうとはしない。食後、部落の方で宴会を開くと云うので出かけて行くと、勇ましい軍歌に迎えられ、戦後派の現役には調子の狂うことおびただしい。宴会はこの調子で進められ、かつては日本教育の中に生活した彼等は昔を非常に懐かしかっている様だ。蛮社の生活は農業と狩猟が主らしく、単調な生活の中では歌や踊りが慰めなのか、仲々上手で、楽しげだった。話を聞いていると、精悍で目が鋭いが、日本語は我々と変りない故、まるで内地の農村にでも居る様な錯覚を起してしまう。

十一月十三日

交渉の成否を懸念していたが、うまく行ったらしく、意気揚々トラックに乗って帰って来た。早速乗り込んで、一日の遅れを取り戻すべくピアナン社目指して出発。途中独立山にて横貫公路の事務所へ寄り、お茶を呑みながら公路局の説明を聞く。再びトラックに乗り、濁水系の険崖沿いにひた走り、ピアナン社へ向う。濁水系も次第に細まったが、相変らずの灰色の流れで、ここにはスッポンが多数棲息しているとか。周囲の感じは丁度南アルプスに入る様だ。ピアナン社に着いたが、我々の到着が遅れた為ポーターが居ず、やむなく此処に停滞することにする。ピアナン社は濁水系の河

岸の平坦な処にあり、登呂の遺跡に見る様なかやぶきの小さな家が百戸位密集している。我々は医者の彭氏の家に泊めて貰うことになり、夜までの暇つぶしに子供達と遊ぶ。子供達は目がクリクリとして、腹が大きく、はだしで、片言の日本語が話せる。一緒に遊んでいると全く日本の腕白小僧と同じで、いたずらすることも変りない。やはり日本人が珍らしいのか三十人位も集ってかなり上手に日本の童謡を歌うのには恐れ入った。村の小学校へ行くと丁度授業中で、北京語を習っている。北京語の他には算数、音楽など我々の受けたのと同じ様な授業を受けているらしい。山奥の文化と隔絶した蛮人ではあるが、蛮語を話し、中国語を習い、日本語をも解するのだから、我々よりは数段国際的だとも云えそうだ。

夜は彭氏が家鴨を殺して御馳走してくれた。隊長は頭が一番美味なる由を聞いて早速かぶりついたが、どうやらお口に合わぬらしく見えた。腹一杯食事を済して明日からの強行軍に備えて寝に着く。

十一月十四日

ポーターも整揃いし、愈々山へ出発だ。ポーターは七名、うち一名が女子。いかにも屈強な感じで頼もしい。総勢十九名が隊列を組んで行く様子は仲々壮観である。陽射しは強烈で、初日の行動故体調が整っていない為かなり苦しい。濁水系の支流メモタン系を越す。灰色に濁った汚ない流れだ。王氏曰ク「濁水の水澄めば、世に平和が来る」そうだが、この流れでは、世は永遠に平和になりそうもない。しばし歩いた所からトラックに便乗、ピアナンコルまで行く。

コルは広々したカヤトの原だ。寒冷地農作物の試験畠がありその前に警官駐在所がある。その下を流れる大甲溪の上流、ユーショー溪を渡り尾根に取りつく。此処からは山道だ。カヤトの中を細いが明瞭な踏みあとが続いている。登りをしばらく続けると小さな平坦地に出る。はるかに南湖大山、中央尖山の雄大な姿が雲の切れ間に顔を出す。捲道になり、木が茂り始める。等高線に忠実に捲いて二つ程沢を越すとヌカヤトの原に出る。じめじめしたブッシュの中を歩いて来た目にはなんとも気持が良い。目の前に次高山が現れ、これから下るキャワン溪はるか下、その奥はポチンプンシロンから落ちる巨大な岩の塊だ。見上げる桃山の稜線はなだらかな起伏だが圧倒的な高さで続いている。

カヤトの原を更に捲く。点在する巨木は全て焼け焦げて緑の色はない。大きく山腹をも尾根ともつかぬ斜

面を捲き標高記号のある尾根上、二千四米地点から、キャワン渓目指して一気に下る。強烈な下降一時間程で沢に降り、淵行して、二俣点の上部、千九百米附近に幕営。かなり疲労が甚しい。

十一月十五日

朝ポーター達が毒薬を使ってマスを取ると云うので見物に行くが、マスはおろか、ドジョー一匹浮いて来ない。水量と薬の分量がうまくなかったらしく、水中を泳ぐマスの群れを眺めて盛んに無念がっていたが、どうやらあきらめて出発の体勢を整える。

幕営地より十分位沢を行き池有山からのびる尾根に取りつくことにする。踏み跡はあるかなしかで、極めて頼りない。最初から猛烈な急登で、尾根筋を真直ぐ登って行く。木は全く無く、小笹の密生した斜面は、どこが道と云うこともなく至極歩き良いのだが、まともに照りつける日射の酷さは想像以上だ。

喘登すること二時間、沢から望見した岩峯に着く。二千五百米地点でピークは捲いてなおも急登を続ける。とひょっこり肩状の平坦地に出る。喬木が現れ、登りは緩やかになる。肩から十分程歩いた処、枯木が四、五本かたまって立っている地点の右側、針葉樹林の中に池があり、さほどきれいな水ではないが、十分飲用にはなる。我々の訪れた時が乾期故、年中涸れることはないだろう。

しばらく下り気味に行き、又登りにかかる。樹林の中で、下は猛烈な矢竹の海だ。ルートもしばしば失う程で背丈を没し、先行者の姿も見えない。竹の強力なバネを押しきって稜線の下、三千二百米程の地点に桃山から来る縦走路に出る。よく踏れた歩き良い道だ。

池有山のピークは踏まず、直接シンタに下る。等高線沿いに山を捲き、北側に出ると、大覇尖山の異様な岩峯が目に飛び込んで来る。一同一瞬歓声も上げず見惚れたが、なんとも豪快な岩の塊だ。明日はあの真下に行けるのかと思うと、楽しくもなるが、渓谷を挟んでかなり遠い様な気もする。

百米も下ると鞍部だ。此処が山の人の言うシンタで池があり、平坦なカヤトの中は絶好の幕営地と云える。

標高差千五百米もかせいだ為かなり疲労が激しい様だ。此処の標高は三千二百米程でかなりの高地だ。日が落ちると突然、全く突然に急激な寒気が襲って来る。日中裸で汗を流したのが嘘の様に池は凍り、足元に霜柱が立って来る。

十一月十六日

隊員の体調が甚だ芳しくない。高山病、風邪などで一日無理をするのは不可能である。停滞し体力の回復を待つことに決定。午前中はカヤトの原に寝転んで午後から池有山のピークに登る。

頂上は小笹の原で展望は開けているが、すぐ下まで喬木が生えている為、高度感は全々ない。ただタケジン溪をはさんで大覇尖山の雄姿が圧巻だ。

十一月十七日

ポチンプシロンの北側を捲いて、タケジーン溪に出ることにする。シンタより下り気味に草原を行く。十分程で直径五米位の池に出る。氷の下の水はきれいに澄んでいて、テントサイトには昨日の場所より良さそうだ。道は殆んど無いと云える状態で、ポーターのカン任せで進む。大覇尖を右に見ながら一時間程で猛烈な矢竹の海に突込む。直径二糎近いのがそれこそ隙間もない位生えているのだからたまらない。我々の四寸のザックは、まともに竹の襲撃を受けて、まるで重い石を後にひきづる様な具合になる。台湾の山岳は殆んどルートは整備されず、稜線近くは矢竹の海らしい故大型のキスリングは骨折り損になるそうだ。

漸く竹を突切り二百米も下るとタケジーン溪二千九百米地点に出る。沢の横で休憩していると、隊員の一人が忘れ物をして来たことに気づき、若いポーターに頼んで探して来て貰うことになった。今下って来た酷い竹の中をもう一度戻らせるのは気の毒だが止むを得ない。彼はすぐ飛んで行き、待つ我々は焚火をして暖を取っていると、驚いたことに我々が二時間かけて下った道を往復四十分程で戻って来た。老ポーターは驚く我々に、タイヤルの若者は、鹿と競争して負けない。元気盛りの頃は、三日三晩追い廻して鹿を捕えるのだと云う。平地で聞いたら、とんでもないホラと思う処だが、今の出来事を見ると信じざるを得ない。

又竹の中に入って、ガムシャラに突進する。顔中竹の粉だらけで、いいかげん厭気のさした頃ポンと草原に飛び出した。池有山からも見えた。パサラユンの草原だ。ポチンプシロンとパサラユンの豪快な岩塊がすぐ近くだ。

此処から更に登りに移り、少し楽になった矢竹の中を強引に突破するひょっこり稜線に出る。およそ三千米を越す稜線とは思えない樹林の中だ。大覇尖山とのコルへ稜沿いに進み、又現れた竹の中を沢に下る。水の涸れた沢を十分も下ると二俣点に着き、水が流れ

始めたので幕営地に決定する。
夜に入るとかなり冷えるが、昨夜よりは良い様だ。

十一月十八日

次高溪の源流二俣点の左俣を淵行。水は濁れていて歩き良い。ぐんぐん高度をかせぎ、急登をしばらく休らえると大覇尖直下の岩礫の平坦地に出る。ここから眺める大覇尖山は、近すぎる為か、あまり高度感を感じない。

急傾斜の草付きを岩場まで行きルートを求める。完全な乗壁が四面を包んでいて一寸見たところ手がかりはない様だが、只一角だけ樹林帯が高く登っている所があり、唯一の登路を提供してくれる。しかし此処にも三十米位の岩場があり、針金で吊った木の梯子がある。登りはともかく、下りでは大分難渋しそうだ。

取りついて見ると岩はザクザクで、ハーケンを打ち込むことは勿論、満足なホールドも、スタンスもない。難所を越せば後は樹林の中、なんの苦労もなく頂上に立てる。大きな岩塊のゴロゴロした頂上は、丁度甲斐駒の様な感じで、さえぎるものとてない眺望は、全くほしいままの素晴らしさである。

中央山脈をはじめ新竹の街まで見おろせる頂上で吸う煙草の味は、今までの苦労を一遍にふき飛ばしてくれる。

青天白日旗と日章旗を交換して記念撮影を終り、下りにかかる。思った程の苦労もなく無事難所を通過、急な草付きを戻ってイザワ山への縦走路を行く。

大覇尖は丁度、山高帽の様な形をした岩峯で、現地での呼称はパパクワカと云う。岩の塊と言った意味だが、縦走路はその岩と樹林との限界を通っている。

北側は砂礫で、垂直にそそり立つ岩壁の真下を行くのだが、驚いたことにはその壁から巨大なツララが垂れ下がっている。どこから水が湧くのかも不思議だが南面の暑さを思うと、氷のあることなど嘘の様だ。

中覇尖山との鞍部に着く。此処から見上げる大覇尖は草木一本もない、完全な岩の塊だ。東側と北側は深く切れ落ち、馬の背の鞍部は巨大な軍艦のへさきと云える。

鞍部からひと登り、中覇尖の頂きに立つと、もはや新竹県になる。此処からは、ピヤナンの人達の領分外故、彼等は誰も足を踏み入れた者はなく、我パーティにとっては全く未知の処となるわけだ。

小広い頂から、イザワ山に至る稜線は、途中深い矢竹を過ぎると、のんびりしたカヤトの原だ。

池塘が点在し、谷を隔てて、大覇尖の岩峰が、夕陽を浴びている。枯れたカヤトの原は、黄一色に塗りつぶされ、西イザワ山までは、東北の山を歩いている様なのんびりした雰囲気だ。

下りにかかると、俄然矢竹が行手をはばみ、その猛烈さに四苦八苦させられる。漸く過ぎると、又嘘の様な、なだらかなカヤトの原になり、しばらく下った二千八百米地点に幕営を決定。

小さな溜り水があり、薪は少ないが、まずまずの処と云える。

夜に入ると酷く冷え始め、尾根状の所なので、風が通り抜ける。地面は凍って、焚火にかざす温もりも、背筋の方から消されてゆく。

十一月十九日

山にはまだ昨夜の冷気が沈んでいる。零下七度まで下ったらしいが、南国も冬は厳しい寒さなのだろう。

幕営地からすぐ矢竹の中に入り、急斜面を下って鞍部に出る。途中Sが足を捻って蛮人の治療を受ける。相当の荒療治で、目を白黒させたが、大したことはなかった様だ。

鞍部から対面の山腹に登り、カヤトの中を北に捲いて急降下する。降りきった処は、やせ尾根になっており、又急激に広がる奇妙な地形だ。捲き道になり、鬱蒼とした樹林の中を単調に道は続いている。

地図を読んだ感じでは、マダラ溪まではたいした距離でない筈だったが、捲き道は一向に高度を落す気配もなく、ぐるぐると山腹をつたって行く。狩小屋を二軒ほど過ぎ、下りにかかる。のんびりした捲道の後には必らずある、急激な登り下りが、台湾山岳の特徴だが、御多分に漏れず、俄然一直線の急降下となり、マダラ溪に降り立つ。マダラ溪二俣点の少し上部、右俣の河原に幕営と決定。

十一月二十日

右俣から沢を少し離れ、左俣に向う。二岐道になり、沢に下っている方が井上温泉へ、登っているのが秀巒へ向う道である。秀巒へのルートをとり、すぐ左俣へ出る。水量は多いが悪場はなく、仲々楽しい沢だ。右岸から山道に取りつき、ゆるやかな斜面を登る。捲き道となり、高度が仲々上らず うんざりする単調な道だ。小沢を越して、一息登ると、稜線に出る。樹林が茂って、眺望は更になく、一体どの辺なのか、さっぱり見当がつかない。道は太く、良く踏まれているの

で間違う心配はないが、あまりの単調さに、一体どの位歩いたのか見当がつかなくなる。高度計は相変らず二千二百米を指していると云うのに、周囲の樹木は青々と茂っていて、とても稜線のものとは思えない。

突然、先行していたポーターが部落の見えることを知らせた。稜線が一段低くなって、展望が開け、谷間に数戸の軒を並べた部落が見える。

人里近いことを知って、勇気百倍、ポーターは一気に駆け下ろうと云うが、山での遠近感は彼等と我々では相当異る。それは行動能力の差であるが。

部落手前の尾根上に幕営と決定する。ポーター達が蛮刀を振って勿ちキャンプサイトを造り、小枝を使って骨組みし、テントを被せて、こしかけ小屋を作った。山中最後の夜を焚火を囲んで大いに楽しもうと云うわけである。今日の幕営地は始めて水が無いので、携帯食を使い、秘蔵の粟酒を酌む。焚火のほてりと、アルコールの作用で次第に愉快になった我々は、互いに得意の歌を披露して国際的晩餐を楽しんだ。

十一月二十一日

耳を澄すとなにやら人工の物音がする。トラックの音であるとポーターは断定し、里までおりれば、最早歩く必要はなさそうだ。元気一杯、例のダラダラ道を下って行くと、道は愈々明瞭に、太くなり、算さえ現れて、我等が旅の終焉も間近きを思わせる。

尾根の腹を捲いて、パッと空地に飛び出すと、蛮人が二人、怪げんそうに我々を眺めている。ピアナンの蛮語と共通の種族らしく、勿ちうちとけて、話すうちに、最早、此処は秀巒の村はづれであり、彼等はこれから大覇尖までワナにかかった獲物を取りに行くと云うことが知れた。我々の見た範囲では、ワナには全く獲物はないらしかったが、此好人物の蛮人を失望させるのも不本意なこと故、先づは道中の無事を祈って、秀巒の部落に降り立つ。

新竹側の部落は、ピアナンの側に比べて、非常に明るく、清潔な感じだ。竹造りの家も珍らしく、久しぶりの人里にキョロキョロしている間に又しても蛮人に取り捲かれて見物されてしまった。

店に入り、欠乏した蛋白質を補うべく、鶏三羽を買って、店の方の好意により料理して喰う。勿ち平げて互いの食慾を驚嘆し、今までの耐乏生活を思いやる。河原には天然の温泉が湧き、露天で一浴びして、今少し距離を伸ばすべく田浦なる部落へ向う。旧日本軍の道路は平坦で、非常に歩き良いのだが、巾三米では、

トラックの恩恵に浴すことも出来ず、いささか失意のうちに田浦に到着。警察署長の厚意で、警察に厄介になることになる。警察に厄介になるとは、余り響は良くないが、親切な方達で、色々お世話を受けた。

十一月二十二日

山の中では、連日好天であったが、今日はびしょびしょと霧の様な雨が降る。

単調なダラダラ坂を峠まで行き、一気に下る。此道は自動車が入れない為、丁度日本のテンビン棒の様な竹を使って、物資を運搬しているらしい。サルマタ一丁の恐しく体格の良いおじさん達が、ホイホイと調子良く歩いている。

峠を下ると下は晴、日本の農村と変らない風景だ。新竹県はその名の通り、竹が名産らしく、家も垣根も竹造り、竹万能の土地柄らしく、竹を搬出する人達も多く見かける。この竹運びは実に豪快で、十五米もあるかと思われる孟そう竹を三十本位、峠から街まで運び下ろす。まるでダンプカー中国版とでも云いたい傍若無人ぶりに少々頭に血が上らぬでもないが、その見事な操作ぶりは感嘆してしまう。

田舎道をのんびり行けば、次第に町らしくなり、遂にバスの待つ尖石に到着。尖石より竹東、新竹へ出る新竹駅で我々と労苦を共にし、献身的に働いてくれたポーターの人達と別れ、新竹の街を見物して台北に帰る。台北は霧雨が降り、うすら寒い陽気、ホテルに戻って十一日ぶりに団長等と再会、互の成功を喜び合う。

十一日二十三日

午前中休養。石鹸を使わない床屋に行ったり、ヒゲをそったりする。

午後、先輩にお供して町一番おいしい広東料理を御馳走になる。生きた蛇のキモを紅露酒の中に入れたキモ酒はサファイヤ色で、その味も、又、絶品であった。

台湾は食道楽の国で、島全体が、お鍋の中で、ゴトゴトやっている様だ。どんな路地に入っても湯気をたてた屋台が並び、豊かな色彩を誇った果物屋台が並んでいる。そして、誰でもおいしい物が豊富に、安く、食べられる。食糧事情は豊かだ。

淡水のほとりには人力車が広い河原にびっしりと立ち並ぶ。市も大して広くないので、結構、重宝がられている。しかし、町内で、のんびりと客待ち顔で並んでいる人力車を見ると、労働力が余っている様だ。

午后三時半からビール会社を見学。台湾では酒類も

専売局の管理になっており、ビールは一種類しかない。ホップが効いていず、アルコール的で、甘口である。大急ぎで工場内を見学し、会議室で、製品を試飲する。ベルトの上を流れる如くビールが次々とあけられていった。

十一月二十四日

小型の観光バスで台湾大学に向う。広い校内には、南国の植物が美しく植えられてあり、学問する場にふさわしい落着きをもっている。

体育実技として国技のバスケットが週二時間あるそうだが、運動部はない。試験地獄と宿題に追れるからだそうだ。

中日文化経済協会に挨拶に行く。

夕方、ジープと外車に分乗して陽明山に行く。日本庭園で、夕日の沈んで行く観音山を眺めていると、昔ここで憩うた日本人の事が偲ばれる。ポインセチア、ハイビスカスが咲き誇っている。

高玉樹氏の別荘に向う。ここ草山は箱根のような温泉郷で各界名士の別荘地でもある。そして今日は、理工科の先輩がジンギンカン・パーティーを開いてくれた。次々と到着する諸先輩に挨拶する。庭を散歩したり、テーブルを囲んで自由な、なごやかな同窓の集りだった。

十一月二十五日

全民運動会に招待されて北投迄汽車に乗る。今迄、運動の余り盛んでなかった台湾で、全台北市民が、レクリエーションとして自転車やハイキングに集る。家族づれでも、学友でも喧嘩友達でも、誰れでもよい。皆が一緒に自分達のペースで楽しむ会だ。四千名の人が参加したと言う。雨期に入って毎日、シトシトと降る台北も、今日丈は暑すぎる程の上天気。市民の前に紹介され、挨拶する。砂糖キビをかじったり、アイスキャンデイをしゃぶったりしながら、一歩進んで、数分休むのんびりして、善光寺に向い、そこで昼食。解散して埃落した北投の温泉につかり軽く食事を取る。

晩、台北市内で市長主催のパーティーに招待される。四川料理で、一般に大変辛く舌がピリピリする。

山岳班のスタイドの映写を楽しむ。

十一月二十六日

朝から帰国する団長、隊長は、お世話下さった方々に挨拶にまわる。

昼に飛行場へ車をとばす。小じんまりした飛行場で、ロビーも静かだ。山岳協会の方々、諸先輩、反共救国青年団の方の見送りをうける。CATの手落ちで出国許可がおりていず、次の便にする。警察に行き、至急に許可を取る。CATHYで、三時半発。

ホテルに帰って、林さんのスライドと拝見する。

十一月二十七日

南の島、台湾を味わうべく雨の台北を後にして、高雄に向う。南に進むにつれて空が明るくなる。道路沿に、ヤシ、ババイヤ、バナナの木が並ぶ。その実の収入で、道路の維持をまかなうという事だ。

台南で下車、二人ずつペアになり人力車で市中を見物する。台湾城、赤嵌城、孔子廟のはなやかな赤、青緑の色彩には、日本の古寺の持つ様な、わび、さびの感じはなく、どれも同じ様な感じしかうけない。

台南から、ハイヤーで高雄へ、料金は、バスの合計と同じ、宿舎の華都ホテルに落着く。

十一月二十八日

朝、オカユを食べて高雄神社を訪れる。この神社は日本時代のものだが、日本の姿をとどめるものは、はぎとられ、鳥居も中国的感覚にぬりつぶされている。軍港に向ったが、港内では駐車禁止、立ちどまって、見に行く事も出来ない。頼みこんで、ほんのちょっとのぞかせてもらった。背後には銃を持った憲兵さんがいる。呉さんの案内で海産物の食堂街に入り、海老、貝、カニ、刺身を料理してもらう。

快車に乗り、清水の楊先生の別荘に向う。氏は、省議会の長官として十三年要職にあり、国民の信望は絶大と聞く。当年七一才。

夜食は台湾の田舎料理を戴く。煮果、そば、まん頭、南京豆スープ。食後、邸内を案内していただく、

南管という歌を聞く。胡弓、琵　、尺八、琴のようなもので四重奏。若い女性の歌手が一人、単調なメロディーに合せて漢詩を高く歌いあげる。

十一月二十九日

六然居を辞し、車二台で楊先生の手がけた開発中の農村を見学する。排水溝、給水溝をもうけ、農地の中央には、学校、病院等の公共施設を全部集め、一箇所で用事が済むようにするという。その改善の際にも、農民にその案を押しつけるのではなく、飽く迄も、農民の賛意の上に立って動いているとの事。

台中で、彰化銀行に寄り、同学会の方に、日本料理のランチを御馳走になる。

食後、省議会、諸政治機関を見学。又、女流建築家の設計による華かな中国文化をもり込んだ教師会館を見物。見送りうけて、台北に戻る。

十一月三十日

高雄より戻り、いよいよ台湾滞在も終りに近づいた。

離台迄の残り少い日々と自由に歩く。台北市街を散策する。台北の中心部は西門といい、台北市には東西南北に各々門があり、西門もその一つであり、日本の銀座に匹敵する。商店、映画館が並び、大変にぎわっている。東京と違う所はパチンコ屋が無い事、又、喫茶店が大変少い事である。しかし、西門で、一軒見つけて入る。コーヒーは余り旨くないが、室内装飾は、結構、デラックス。ウエイトレスは日本語が解らず、支配人を呼び、コーヒーを注文する。しばし、紫煙をくゆらせ憩う。

台湾のタバコは、長寿、双喜が愛煙されている。八十円か九十円程である。一般に味は軽く、専売で、箱には、建設台湾、復興中華の文字がある。

夜になると街の人通りも少くなる。台湾では公娼が認められていて、甲級なる看板があった。又、映画館、芝居小屋が満員になるのもこの頃からだ。テレビがまだ普及していない故（十一月に開局したばかり）、映画は人気がある。日本映画は、大変人気があるそうで、字幕は使わない方が、人気があるそうだ。

仕事を終えた労働者達は、屋台の茶屋に入り、ウーロン茶と、ユアズルと言う西瓜の種を器用に食べながら、大声で、一日の憩の時を過していた。

ホテルに戻った後、隊員一同、一日の見聞した事を話し合う。

十二月一日

今日も街に飛び出す。街は相変らず台湾パセリとニンニクの強烈な臭いと輪タクの走り廻る喧騒さにあふれている。日本時代の古びたコンクリートの建物に原色の漢字の看板がゴテゴテとつけてある。アメリカの高級車に混って日本のブルーバードがタクシーとして走っている。

ミヤゲ物には、バナナ製品、文石、サンゴ、ミノ虫の皮、水牛の角等、しかし、材料に較べて作りが貧弱なのは惜しい。

買う時は、覚えた言葉を総動員して、身振り手振り

でまけさせる。

台湾の酒は、一般に飲まれているのは、老酒、招幸酒等で、洋酒は出まわっていない。酒を飲むのは、料理屋などでの宴席が多く、日本のバー、飲み屋のたぐいは少い。

十二月二日

今日は、輪タクに乗って市内を廻れるだけ廻る。まず博物館、総統府、植物園を見る。

台湾は亜熱帯地方に属する故、植物の種類も多く、色彩も、強烈なものが多い。青い空に真直ぐのびるヤシの木・湿った池に純白の花を咲かせる水蓮・根が地上に出ている榕樹、気品と伝説に香る蘭・その他名の知らぬ樹木や草花は我々にとって皆目新しく珍らしいものであった。再びリンタクで郊外に出る。淡水河にかかる中興大橋を渡ると田園風景になる。遥るか台北市を囲む山々が望まれる。北には陽明山・観音山、南には台湾の背骨をなす中央山脈地端の山々

台湾とはいえ雨期に入った十二月の風は冷たい。田のアゼ路の柳が、今日の強い風に流れている。道行く人々が寒そうに背をまるめて歩いている姿が心に残った。この人達と我々はこれからどの様につながって行くのだろう。そんな思いが去来した。再び市内にもどり、昼飯を食いに円環に行く。ここには小さな食物屋が軒を連ねている。値段が庶民的なのも肌に合う。料理される蛇・山羊・犬・鶏・鴨・犬等が店の前にぶら下っていて好きなものを食わせてくれる。台湾では頭の先から足の先まで食用に供し、無駄になるところが少ない。

ホテルにもどると先輩の楊先生が訪ねておられた。我子に接する様に柔しく厳しい態度でいろいろ教えを下さり、角帽をかぶられて一緒に写真を撮る。夜、台湾在中お世話になった方々を招いて、淡水河のほとりで宴を開く。沢山お招き出来ないのが残念だ。我々の感謝の気持を少しでも表わしたい。本当に台湾のいろいろな方々にお世話になった。いよいよ明日は台湾を離れるのかと思うと寂しくなる。それ程、心がつながっていたのだ。

十二月三日

午前中、荷作り完了。午後三時に山岳協会から迎えの車が来る。荷物を積み込み、旅館の人達に別れをつげる。わずか一ケ月足らずであったが、同じ屋根の下に居た彼等が、家族の様に思えて別れにくい。車は見

なれた台北の街中を通り抜け、基隆港迄直行する。出国・税関等の手続を済ませ、出港までの間、港を見に行く。同行の山岳協会の方が案内して下さった。夕食後、桟橋に行く。乗船し、甲板に並ぶ。出帆の汽笛の蒸気が白く吹き出す。我々は別れの言葉として、校歌を歌う。岸にいる先輩も一諸に歌う。船は静かに離岸し、見送りの人は、港の光を背にうけて、いつ迄も動かない。

船は夜の真黒い大洋へと乗り出した。

十二月四日

船は激しくゆれ、全員、立つ元気もなく、ベッドに横になったまゝ動かない。しかし、食事の時は別だ。食堂へかけあがって行き、腹につめ込む事に専念し、終れば直ぐさまベッドへと飛んで行く。我々は皆、昼も夜も寝っぱなしであった。

十二月五日

今日になってゆれは、一段と激しくなった。

出航と同時に横になり、起きあがれずにいるHは、今日も食事がとれない。このままでは航海の三日間何も食べられそうもない。体が衰弱するので、無理にもゆれの少ない船底の部屋に移さなければと、かついで降ろす。夜になると、いくらか口もきける様になり、食事も少し喉を通る様になった。

今日は船の前方に、雨にかすんだ奇怪な形をした島を見る。

十二月六日

今日はゆれがだいぶ少なくなった。Hも食事をとり顔色も良くなった。皆でゲームなどして遊ぶ。

いよいよ明日は日本に着くので、入国の準備を始める。夕方船長が四国沖を通った事を知らせてくれる。外へ出て見ると、足摺岬の灯が見える。日本だ。

夜、船長を招いて、航海の話や海の伝説を聞く。

ミヤゲにもらったバナナは、黒くなってしまった。

十二月七日

朝起きると神戸だった。太陽が金色に輝きながら昇って行く。日本の港でこの様な美しい朝日は、印象的だった。油の様な海面を、船は静かに進んで行く。遥るかに六甲の山々が明るく、かすんで見える。

港には大きな船が停泊し、静かな活気が感じられる。船が接岸すると、出迎に来て下さった監督や先輩が、

船に乗り込んでこられた。「行ってまいりました」「ごくろうさん」の後、話はつきない。

街に出る。夜行列車までの間、一ヶ月ぶりに見る日本は、変ってはいないだろうかと、改めて観察する。再び見る日本は豊かで美しいなと思った。それが嬉しかった。

行く時お世話になった関西支部の先輩方に見送られ、一路東京へと向う。

十二月八日

六時東京駅着。一足先に帰られた団長・隊長・その部員が迎えてくれていた。

皆どこも変っていない。相変らずの黒い顔が、ニコニコしている。

八時、東京駅で遠征隊解散。

各自、一ヶ月ぶりの我家へと帰っていった。

B　平地隊

十一月十二日

今日はこの国で国父と仰がれる孫文の生誕記念日で、街は赤や青の色鮮やかなアーチや旗でにぎやかだ。登山隊の出発した後のホテルは火の消えたように静かである。午后、校友呉炎山氏の御案内で鳥来、仙公廟へ行く。呉氏は学院時代に渡辺先生の級に学ばれた方である。鳥来は山地原住民のタイヤル族の部落でその名の如く温泉がある。（ウライはタイヤル語で温泉の意味。）あぶなげな手押しのトロッコに乗って十分程奥へ大きな滝を見に行く。一緒について来た中学生位の土地の少女達が、かなり上手に日本語を話すのに驚く。

彼女等は観光客にお土産を売っていて、山の言葉や台湾語は勿論相手によっては片言の英語すら話す。

仙公廟は台北と鳥来の間の山の中腹にある道教の寺である。平地から見るとかなり高い所に夕陽を浴びて黄金色に光っていた。長い石段を登ると、飾りの多い極彩色の御堂では、ひざまづいて熱心に祈っている人

が二十人位はいる。霊験あらたかなので参拝の人が絶えないということである。

夕暮れに台北へ戻り、淡水河畔のテーブルでダイナミックなジンギスカン料理を味わう。折しも満月がのぼり十一月というのに河風が心地よい。

十一月十三日

今日は休養日とする。並木、医師の診察を受けに行く。次第によくなっている由。午后植物園へ散歩に行く。快晴で陽さしは真夏のように強い。だが風はさわやかだ。植物園は人影も少なく、蓮の花、仏桑花、鳳仙花などが咲き、ヤシの大木が涼しい蔭をつくっている。

十一月十四日

明日台中へ出発の予定で荷物の整理をしているところへ、突然、強烈な台風が接近しつつあるという情報が入る。過去七十年の間に五回しかないという程のもので、しかもまともに向ってくるらしい。山岳協会の蔡氏がみえて、台風の状態、ピーナンとの連絡などについて打ち合せをする。

夜は副隊長の知人　顔氏のお招きで夕食をいただく。気象台でその都度の天気図をもらい、心配のうちに就寝。

十一月十五日

氏と副隊長が警察へピーナンとの電話連絡に行く。登山隊は予定より一日遅れて通過した由。

幸い台風の進路が急に変り本島には大きな影響を与えない模様なので、正后台北を出発し台中に向う。

台中は落着いて静かな町である。台中同学会長の王金海氏を彰化商業銀行に訪ねる。同銀行には他に四人の校友が居られ案内していただいて彰化同学会訪問のため彰化市へ行く。同学会長の呂世明氏は彰化県の県長で相憎く不在であった。県庁にペナント等を託してすぐ憂山の八卦山の大仏を見に行く。薄れてゆく残照の中にヤシの木のシルエットが南国らしい情緒を醸す。

夜は台中同学会のお招きで夕食会があり、八名の先輩校友が出席され昔話や近況報告などで和やかな時を過す。更に席を我々の宿（校友の経営である）に変え、わざわざ訪ねてみえた彰化の呂会長、折よく同じ宿に居られた高雄同学会長の林東淦氏も交えて夜おそくまで話がつきなかった。

十一月十六日

台中駅前から急行バス金馬号で日月潭に向う。台湾省の政治の中心である省政府、省議会は台中の郊外に在る。道路は良く、長いネムの並木道である。途中到る処バナナ畑がみられる。中部地方はバナナの産地で畑は山のかなり上の方までのびている。

日月潭は海抜七六〇米、周囲二十数キロの湖でその中程にある小島から北側の湖面が日輪に、南側が月に似ているのでその名があるといわれるが、現在はダムになっている為その形は見られない。シーズンオフのせいか静かで美しい湖である。

午后、モーターボートで対岸の蕃社や廟へ出かける。先ず文武廟、三六五段の石段を一直線に登った小山の頂上にある例の如く極彩色の寺である。化蕃社は山地原住民ツオウ族の部落で、丁度北海道のアイヌ部落のような酋長や娘さん達が求めに応じてツオウ族伝統の衣装をつけて歌や踊りをみせる観光村である。収穫期でそちこちの庭いっぱいに穀物を乾している。中学生の修学旅行とぶつかったのでひどくにぎやかだ。最後に唐の三蔵法師の骨を祀るという玄光寺。ここは飾り気のないコンクリートの御堂で、内部は螢光灯の照明であった。

十一月十七日

今日も快晴。南下するにつれて次第に暑くなる。相憎く台南同学会の方が不在で、ペナント等を依頼して辞し、副隊長の知人を訪問する。次いで留学生楊さんの兄上季氏に市内の名所を案内していただく。

台南は古い町である。十七世紀に鄭成功がオランダ人を追放してから二世紀以上も台南は台湾第一の都であった。赤嵌楼はオランダ人が建てた城塞で現在は歴史博物館となっている。延平郡王祠は中国の民族英雄、鄭成功を祀ったもので、日本時代は鄭成功神社と云い、今でも社務所や灯楼などが残っている。他にも数多くの名所旧蹟があるが時間がなく残念ながら高雄へ急行する。軍用トラックやジープがせわしく往来する道を約一時間。高雄では連絡の行違いで約束した林同学会長に会えず、灯のついた街を宿を探して歩くのはいささか心細い。

十一月十八日

朝のバスで四重溪へ向う予定を変更し、高雄附近をまわることにする。タクシーを交渉して先ず大月湖へ行く。整って清潔な有料公園である。景色のよい処々に中国風の亭があり花が多い。日曜というのに人が少

ないのに驚く。そこから左営の蓮池潭にまわり台湾の代表的風景として名高い春秋御閣をみる。大月湖とは逆にゴミだらけで露店や休み所がたち並び、スピーカーからは日本の流行歌が大声で流れている。人も多い。左営は日本時代と同様、海軍司令部があり何となくものものしい空気だ。市内に戻って高雄に行く。この高台からは街や港が一望のもとなので写真撮影厳禁。あたりは樹蔭に涼を求めて遊びにきた人々でにぎやかだ。

午過ぎ、高雄を発ちジーゼルカー、バスと乗り次いでやっと夕方、強い風がわずかな軒並みを吹きぬける淋しい四重溪に着く。久しぶりに畳の部屋にカヤを吊って寝る。

十一月十九日

朝のうち四重溪の附近を歩き廻り、バスで恒春を出てタクシーでガランビ岬へ行く。途中の墾丁公園には林産試験所の熱帯植物園があり、その奥を少し登ると鐘乳洞がある。附近はまるでジャングルの趣きである。

驚いた事にそこで飲み物を売っている人が居る。一日に何人がここを訪れる事か。それでもこの密林のような所で店を開いているとは気の長い話だ。鐘乳洞の上の岩に登ると真っ青なバシー海狭に突き出たガランビ岬がみえる。ガランビ岬についてはヤシの木繁る砂浜を想像していたが全くそうではなかった。灯台の前は草原で海はまだ大分下の方だ。陽ざしは痛い程強く、あたりは乾ききっている。南部は今乾燥期でその上風が強い。ここも又われわれの他に訪れる人は無かった。

埃だらけで四重溪に戻る。

夜、林はずれの小さい廟では数人の老人が腰かけて読経していた。日本の経と大分違う。歌うように長くのばすその節はしばらく聴いていると身に心地よく美しい。星の数が非常に多く、明るいのは乾期だからか。

十一月二十日

今日も暑い。風も雲もなくじっとしていても汗ばむ程だ。楓港にでて台東行きの急行バスに乗る。東海岸への道は楓港から山を越して続き、埃の道を三時間半もガタガタ揺られるといい加減疲れる。

台東は思いの外ひっそりとして陽ざしだけが眩しい。小さな駅からガソリンカー一両編成の特快車で花蓮に向う。汽車は山と山との間の広い河原に沿って走る。玉山（新高山）の入口、玉里を過ぎる頃から次第に曇って涼しくなり、花蓮に着いた時は上着をつける程になった。

花蓮は裏日本の漁港という感じで、天候のせいか、古い建物のせいか淋しい印象。だがマーケットや飲物店のたてこんだ裏通りはやはりにぎやかに活気があふれている。

十一月二十一日

太　閣ー天祥間の道路は時間制の一方通行なので早めに宿を発つ。太魯閣は東西横貫公路の入口で、そこから天祥までの間、道はタッキリ溪の急流に沿って大理石の山をまき、いくつものトンネルをくぐって続いている。このひんやりした大峡谷の懐深く入ると、聳える岩山の上に空は小さい。

午后、花蓮郊外のアミ族部落で踊りがあると聞き見物に行く。アミ族は海辺に住み、その伝統的な祭りの衣装は山地のそれよりも華やかである。踊りはテンポが早く比較的単純である。本来は収穫期と男子の成人祝いの祭に行われるそうだが、今はその他にも観光客の求めに応じてもいる。村の人同志が時々勢いよく日本語を話しているのを聞いてたずねたら、アミ語は語数が少ないので話がややこしくなると日本語が飛び出すのだそうだ。勿論彼等は台湾語も話すし子供達は学校では北京語である。

日暮れ近く飛行機で花蓮を発つ。厚い雲をぬけると一面の雲海。いくつかの高山だけが頂きをのぞかせ、はるかに新高山が夕陽に映えている。夜の台北は寒い程だった。

十一月二十二日

早速に訪ねてみえた蔡氏と共に副隊長は警察へ桃山との電話連絡に行く　登山隊は未だ到着しない由。悪天候で停滞したのかもしれない。

三菱商事の池田氏（校友）のお招きで昼食をいただき、午後はやはり三菱の村上氏（校友）の案内で買物をする。

夕方、全く思いがけず突然ドヤドヤと足音がして山本隊長の真っ黒な顔面が現れた。山岳協会の王、林氏はじめ隊員もみな陽やけして元気いっぱいである。何はともあれ乾杯して成功を喜び合った。

行動表

11月2日　曇	11月1日　曇	
○神戸三ノ宮駅着 (7.00) ○同和海運事務所にて乗船手続 (7.30) ○出入国管理事務所にて出国手続 (11.00) ○昼食会 (12.00) ○O.B関西支部主催歓送会 (18.00〜21.00) ○隊員，各O.B宅に分宿	○ビザおりる ○山口OB宅に集合 (16.00) ○東京駅発 (22.35)	

11月5日　晴	11月4日　俄雨のち晴	11月3日　雨のち晴
○神戸港才三突堤より出航 (8.00) ○朝食 (8.30) ＝台湾時間に合せて1時間遅らす＝ 以下，台湾時間 ○ミーティング (14.00〜16.00) ○夕食 (17.00)	○同和海運に集合 (17.00) ○税関検査 (17.30〜17.50) ○台東輪に乗船 (18.00) ○外出，夕食，六甲摩耶山に登る (19.00〜21.00) ○帰船 (22.15)	○同和海運事務所に集合 (17.00) ○同和海運主催歓送会 (17.45〜19.30) ○各O.B宅に分宿 （雨のため出港が一日延びる）

11月8日　曇のち晴	11月7日　晴	11月6日　晴
o体操　（6.30） oパッキング，上陸準備 （14.00〜16.00） o基隆入港　（17.30） oイエローブック 入国書類検査 o基隆港にて，仮泊	o体操　（6.30） oミーティング （8.30〜10.00）	o体操　（6.30） o台湾上陸，入国書類に記入　（9.30） o船長に台東輪を案内してもらう （13.00〜14.40）
11月11日	11月10日　うす曇	11月9日　曇
o午前中，パッキング，その他入山準備 o午後，自由行動	o台北市政府訪問 （9.10） o日本大使館訪問挨拶 （9.50） o竜山寺見物 （10.30） o中国青年反共救国団訪問　（11.15） o台湾省体育協会 （11.55） o午后，自由行動	o上陸　（9.00） o税関検査　（10.00） o基隆発，富国旅社着 （11.00〜11.45） o台北市YMCAにて台湾省山岳協会主催昼食会（12.30〜14.00） o才一飯店にて台北市，早大同学会主催歓迎会 （19.00〜21.30）

11月14日　晴	11月13日　晴	山岳行動班
		11月12日　曇のち晴
o朝食　(6.10) o南山出発　(7.40) o可浅橋(　(8.54) oピアナン鞍部 (11.20〜12.25) o2490米地点 (15.12) oキャワン溪2000米 (17.30) o夕食　(18.50)	o朝食　(5.40) o出発，トラックチャーター　(7.15) o独立山　(7.50) o南山着　(9.15) o昼食　(13.50) o夕食　(18.00)	o宿舎出発　(8.30) o台北駅発　(9.10) o宜蘭駅着　(11.15) o食糧，装備買付 (11.45〜12.40) o宜蘭発　(13.10) o松羅　(14.33) oテント場　(15.35) o夕食　(18.00)

11月14日	11月13日　晴	平地行動班
		11月12日　曇のち晴
o荷物の整理，午前中 o副隊長，並木，丁氏と共に，気象台へ，台風情報を聞きに行く (20.30)	o各自，自由行動	o台北駅にて山岳班を見送る　(9.10) o鳥来の高砂部落，瀑布，仙公廟を見物 (13.30〜17.30)

11月17日　晴	11月16日　晴	11月15日　晴
○朝食，シンタ出発 （6.00〜7.00） ○タケジン溪支流 2795米地点 （9.05〜10.10） ○昼食2900米 （11.17） ○稜線，県界尾根 3170米（13.42） ○大覇尖山直下 二股地点2980米着 （15.38） ○夕舎　（17.30）	＝停滞日＝ ○テント場発 （13.10） ○池有山頂 （14.15） ○テント場着 （16.30） ○夕食　（17.30）	○朝食　（5.18） ○キャワン溪出発 （7.25） ○昼食，2450米地点 （9.25） ○昼食，2920米地点 （12.25） ○池有山肩，3200米 （15.42） ○シンタ着　（16.36.） ○夕食　（18.00）

11月17日　晴	11月16日　晴	11月15日　曇のち晴
○日月潭発　（8.30） ○台中発，台南着 （12.08〜14.32） ○台南学会訪問 （14.50） ○台南市内見物 （15.10〜17.10.） ○台南発，高雄着 （17.15〜18.15） ○高雄同学会会長訪問 ○華都大旅社泊 （19.20）	○台中発　（8.30） ○日月潭着　（11.00） ○文武廟，化蕃社，玄光寺を見物 （12.40〜15.40）	○副隊長，S氏と共にピアナンとの電話連絡のため警察へ行く （9.00） ○台北発，台中着 （12.00〜15.05） ○台中同学会，彰化商業銀銀行訪問 （15.20〜16.00） ○彰化同学会，彰化県庁訪訪問 （16.45〜17.45） ○台中同学会歓迎会 （18.30） ○宿舎に帰宿（22.00）

11月20日　晴	11月19日　晴	11月18日　晴
o朝食　(6.00) oテント場発(7.35) o1770米溪，分岐 (9.12) oマダラ山頂2170米 (12.15) o昼食　(13.00) o2500米地点，尾根上　(15.15) oテント場着(17.50)	o朝食　(6.30) oテント場出発 (8.45) o分水嶺1850米 (10.00) o昼食，1900米地点 (13.45) oマダラ溪出合，テント場着　(17.14)	o朝食，テント場発 (6.10～7.20) o大覇尖山鞍部3498米 (9.22) o大覇尖山登頂 (10.50) o鞍部出発　(12.00) o中覇尖山　(14.31) oイザワ山　(15.25) oイザワ西峯下着 (17.00)

11月20日　晴	11月19日　晴	11月18日　晴
o四重溪発　(8.15) o楓港　(8.50) o台東発　(12.50) o台東着　(16.50) o花蓮着　(16.50) o国際旅社泊	o四重溪附近散歩 o四重溪発　(10.10) o恒春　(10.45) o墾丁公園 (13.00～12.30) oガランピ岬 (13.00～13.40) o四重溪着 (15.00)	o大月湖，左営春秋閣高高雄神社見物 (8.30～11.00) o高雄発　(12.28) o屏東，四重溪着 (13.07～17.20) o清泉旅館着

11月23日	11月22日曇のち小雨	11月21日　晴
o午前中休養 o台湾ビール会社見学 （15.30〜18.30）	o朝食　（6.00） o田甫出発　（7.20） o峠，宇老派出所 （9.20） o柿山派出所 （11.30） o綿屏昼食　（11.50） o尖石派出所 （13.37） o尖石バス乗車，新竹 （14.32〜15.35） o竹東，台北 （16.05〜18.40）	o朝食　（6.05） oテント場発（7.30） o尖石郷横山分局 （11.00） o秀巒 （12.00〜15.35） o田甫派出所（16.50） o夕食　（18.40）
11月23日	11月23日	11月21日　晴のち曇
同　上	o副隊長，並木，S氏と共に桃山温泉との電話連絡のため，警察へ行く （9.12） o台湾手工業センター見学 （13.30） o山岳班帰宿 （18.00） o隊員一同にて夕食会 （19.00）	o花蓮発　（8.40） o天祥　（9.15） o花蓮着　（11.30） o花蓮郊外，アミ族部落訪問（14.00〜15.45） o花蓮飛行場発 （17.35） o富国旅社着 （18.00）

11月26日	11月25日　晴	11月24日　晴
○団長，隊長，富井隊員帰国 台北市飛行場に見送る	○山岳協会主催 台北市民運動会に参加 ○台北発　（9.10） ○北投，善光寺 ○台北市長，山岳協会会長周百錬氏主催夕食会 （18.00～21.00）	○台湾大学訪問 （9.40～11.15） ○中日文化経済協会訪訪問　（11.30） ○陽明山　（16.30） ○台北市理工系同学会歓迎会 （17.30～20.00） ○陽明山温泉 （20.15～21.30） ○帰宿　（21.45）
11月29日	**11月28日　曇**	**11月27日**
○竜井のモデル農村見学 （9.00～11.00） ○台中着　（12.00） ○彰化銀行訪問 ○台湾省政府 省議会，台中教師会館見学（13.00～15.30） ○台中発　（16.00） ○台北着　（18.55）	○大月湖，高雄神社見物 ○高雄発　（13.05） ○清水着 ○楊先生宅泊	○台北発　（9.00） ○副隊長を除く8名，氏と共に台湾南部に出発 ○台南着 安平楼，赤楼，孔子廟，鄭成功神社見物 ○台南発　（17.05） ○高雄着　（18.00）

12月2日	12月1日　曇	11月30日　雨のち曇
o午前中，パッキング，帰国準備 o楊先生，林氏来訪 （14.30） o山岳協会の方を招いて感謝の会 （16.00〜19.00）	o自由行動	o自由行動
12月5日	12月4日　晴	12月3日
o船中 海は荒模様	o船中	o台北発　（15.00） o基隆港　（15.45） o税関検査　（18.40） o基隆出港　（21.00）
12月8日	12月7日	12月6日
o東京駅着　（8.00） o解散	o神戸入港 o上陸　（10.00） o大阪駅発　（21.00）	o船中 四国沖通過

ては隊員の負担が非常に重くなってくる。

(二)、計画期間が短かった。

海外遠征に関する計画は、資料の不備な点で、国内の合宿計画に比較し、数倍の努力を必要とする。此の点の認識が不足であったために、綿密な計画がたてられていなかったこと、即ち、遠征計画に対する甘さがあった。計画されたことが現地ですっかり変ってしまう可能性は多々あるが、それに対応する綿密な計画をたてられる期間が必要である。

(三)、準備

隊員のみで総てを準備することは、非常に困難なことである。隊員は、コースの研究・体力の増強に専念し、資金、その他の面に関しては、隊員以外の強力なサポート組織が必要である。

二、台湾にて

(一)、日程上、ゆとりが無かった為、山岳関係者、校友、その他社会人の歓迎、招待、出来るだけ断るようにしたが、好意、善意を無にしたような恰好になり、親善の役目を充分に果したとは云いきれない。もっと積極的に交流すべきであったが、このためには、日程上のゆとりが必要になってくる。

四、反省

総括的な反省

副隊長　吉良　洋二

一、計画、準備段階

(一)ワンダーフォーゲル部全体の行事であるという観念が薄かった。

現役の中にも、OBの中にも、ワンダーフォーゲル部全体の行事であるという観念が薄かった。これは、OB会・監督・コーチ・現役・全員が反省すると同時に、スムーズに運営される組織を再考する必要がある。このことを対外的に公表することは、部の内状をさらけ出すような恰好になるが、我部としては、初めての海外遠征ゆえに、どの程度の関心を持ったら良いのか判らなかった者が多かったのではなかろうかと思い、敢て最初に書き上げた。海外遠征に対しては、現役、OBの全体の支援が無くては我部のような競技部とは異った目的を持つ部にとっ

(二)、ワンダーフォーゲル部としてではなく、早稲田大学、日本国の代表であるという意識のもとに、行動動をしていたが、個々の問題では反省すべき点もあった。

(三)、中国語会話、英会話を隊員全員が勉強しておけば、もっと親善に役立っていた。今后の海外遠征に際しては、このことを充分に留意したい。

三、帰国后

(一)、帰国后、隊員の緊張が解け、跡始末が長びいてしまった。対外的には勿論のこと、対内的にも礼を失した点が多かった。

(二)、準備段階と同様、跡始末の段階でも、隊員以外のサポート組織が必要である。

四、

(一)、今回の遠征に、教授、古参OB、女子が積極的に参加したことにより、台湾山岳会、校友会、並びに一般社会人より、予想外の歓迎を受け、又多くの人に接することが出来たため、より深く、台湾の現状を知ることが出来、当初の計画より多大の収穫が有り、有意義に終った。

(二)、種々問題は有ったにせよ、無事に成功して帰って来たことは、今后のワンダーフォーゲル部にとって、大いにプラスになること、疑う余地はない。

(三)、この遠征を契機に現役と古いOBが交流出来、タテのつながりが深く出来たことは、非常に有意義なことだった。

各係反省

1. 食糧係

近藤　国紀　斉藤　幸太郎

一、立案

部の食糧係は、将来の遠征に備えて色々と遠征食糧の計画を研究して来たが、台湾遠征が正式に決ると、現在の食糧係の和泉チーフを中心として計画を練ってもらった。この計画は、将来大遠征の指標となるべき内容のものであった。

しかし、行動内容が未だ決定されて居ず、台湾の事情がはっきり解っていない時に、計画は作成されたが、台湾の事情が明確になるにつれ、種々の制約が生じ最初の計画とは異るものにならざるを得なかった。

献立表

	朝	昼	夜
1	α米，ウニ インスタント・ミソ汁 干鱈，茶	α米 ダニ（シイタケコビ）	α米，サラダ（キューリ，キャベツ 塩，マヨネーズ） 豚汁（豚肉，ミソ，人参，玉葱 ポテト，ラード） ノリの佃煮，茶，ウニ
2	α米，ウニ ラッキヨ，紅生ガ，茶 コンソメスープ	乾パン，バター 粉末ジュース	α米，ダニ，サラダ（同） ニューギニヤ（豚肉，ナス，ーナツ，玉 葱，ミソ，ラード，砂糖） 茶，ウニ
3	α米，ウニ インスタント・ミソ汁 ピーナツミソ，茶	乾パン バター，ジャム 粉末ジュース	α米，福神漬，茶，ウニ カレー（ソーセージ，ポテト，人参，玉葱 ラード，カレーの素）
4	α米，フリカケ，茶 インスタント　ミソ汁，ウニ	乾パン，ジャム 粉末ジュース	α米，角煮，ウニ 豚汁，（ソーセージ，同）茶
5	α米，ゴマ塩，アミ茶 コンソメスープ，ウニ	乾パン，チーズ ジャム，粉末ジュース	α米，ハリハリ漬，茶，ウニ ニューギニア（ソーセージ，同）
6	α米，フリカケ，茶 インスタント・ミソ汁，ウニ	乾パン バター，ジャム，粉末ジュース	α米，ダニ，茶，ウニ カレー（同）
7	α米，フリカケ，ウニ ウメボシ インスタント・ミソ汁	乾パン ジャム，粉末ジュース	α米，シソの漬物，ウニ，茶 ニューギニヤ（同）
8	α米，フリカケ，ウニ コンソメ・スープ	乾パン チーズ，ジャム，粉末ジュース	α米，角煮，茶，ウニ ポタージュ（ソーセージ，乾燥野菜 ポタモト，ラード）
9	α米，フリカケ，ウニ インスタント・ミソ汁 茶	乾パン バター，ジャム 粉末ジュース	α米，茶，味付ノリ，ウニ ソーセージイタメ（ソーセージ，ラード 塩，コショー）
10	α米，フリカケ,茶 インスタント・ミソ汁，ウニ	乾パン ジャム，粉末ジュース	α米，茶，ウニ，東海漬 カレー（同）
11	α米，フリカケ，茶 インスタント・ミソ汁，ウニ	乾パン チーズ，ジャム，粉末ジュース	α米，茶，ウニ ハヤシ（ハヤシノ素……）

(一)、外貨割当て

今回、外貨は、隊全体で、一九〇〇$下りる事を予程して立案に当ったので、食糧に関しては、国内で、大部分を取揃えて行く事によって、外貨の使用を最少限に食い取めた。

食糧国内買い付け分、二九三一〇円

〃台湾買い付け分　六三四〇円（外貨支払い分）

(二)、現地での買い付けについて

台北、台中、嘉義、高雄、台東等の大都市では、食糧材料は殆んど揃い、値段も日本と変りないが、むしろ、安い位であるという事が解った。故に、現地では買付け時間及び、現地での荷作りの時間を短縮する為、米と肉と生野菜のみ買い、他は全て日本で取り揃える事にした。

(三)、長期輸送の問題

日本で調達した食糧が実際に使用される迄、約一週間余りの期間があるので、出来るだけ変質しない物を選んだ。

又、長期間、汽車や船で輸送されるので　各材料の包装は厳重にし、佃煮、ジャム等は二重にポリエチレンでパックした。

梱包は、上質のダンボールで行った。これは最近のダンボールはがんじょうになり、輸送中、可成り手荒な扱いを受けても壊れないからであり、船での輸送中波に洗われる事を心配したが、絶対にそんな事はないという船会社の人の話があった為であった。

(四)、現地での行動について

現地での行動予定では山間部の行動が十一日間である。この十一日間の食糧重量は一五〇Kgを越える。

これは装備やその他の重量を加味した場合、少数の負荷人員では、背負い切れる事は出来ない。ポーターを雇うにしても、資金面から一人でも少なくする必要がある。その為、極力重量の軽減を計った。

又、幕営予定地が水の便が悪かったり、全くないと予想される所に置いてあるので、これを使わない献立を作った。

朝夕の献立はα米を、昼は乾パンを使用し、その他インスタントミソ汁、フリカケ等を使った。

生野菜類は最少限に抑え、ビタミン類の摂取は薬品による事にした。これは三十五年の日高山脈の夏合宿で一週間や十日位なら、生野菜を食べないでも体に変調をきたさない事が実証されたからである。

カロリー源は、バター、チーズ、ラード等、高単位な物に頼り、一日に四〇〇〇カロリーを取る事を目標

とした。しかし、山間に於いては重量軽減を計り、唯、高カロリーを求めた献立では山での唯一の楽しみである食事を無味乾燥なものにし勝ちである。

入山後二日間、負荷量が許す限り、生野菜や果物類を取り入れた。この他、紅生姜、梅干し、焼海苔等、日本の味を加え、又、佃煮の種類を多くして食事を少しでも楽しいものにする様にした。

又、遠征前に隊員の嗜好を聞き、嫌いなものは取り入れなかった。

尚、レーション・システムは取らなかった。一回の基準量は、一応決めておいたが、入山中の食事量には波があるので一人一回の量を機械的に決めてしまっては、余ったり、足りなくなったりするので、基準量を中心として、隊員の腹具合を見て、適宜、食糧係の判断により量を調節する事にした。

(五)、資金面について

遠征全体が資金に予裕がなかったので、一日二五〇円で、主食、副食、非常食、間食をまかなった。故に食品会社に出来る丈、品物を提供して戴いた　それを極力活用したので、カレーやハヤシライスが多くならざるを得なかった。

以上の様な条件のもとで献立を立てたのであるが、結局、国内合宿の食糧献立と大差ないものになってしまった。

（近藤国紀記）

二、反省

(一)、数量

主食のα米使用は、軽重量、高所生活に適する点（少量の水で足りる。ガンタの心配なし）において、今回、成功であった。今回、隊員の平均年令も、現役よりも高く、又女子との混合パーティであった為、国内の合宿で味うα米の持つ満腹感の欠如と言う問題は起きなかった。この反面、国内合宿の男子パーティの三分の二程度しか食べず、　米、三七〇袋中、一〇〇袋近い余りを出し、又、昼の乾パンは、三分の二を余した事は反省すべき事である。

二二言へる事は、量よりも質である。つまり、主食よりも副食に重点を置き、カロリー源を炭水化物にではなく、蛋白質、脂肪等にその大部分を求めるべきである。

(二)、嗜好満足について

副食に関しては、蛋白源はソーセージが大きなウェイトを示め、やはり、連日の使用には、不満が多かった様だ。

又、昼食の乾パンは、高所においては食欲減退気味で余り人気なく、余りのα米を昼にまわして使用した。

これは、OB隊員が乾パンを食べつけない事にも原因があり、飲物等を研究すれば、十分使える訳である。又、海外に出ると、想像以上に、純日本的な食物（梅干し、トロロコブ、ウニ、緑茶、ミソ汁、ノリ）に対する欲求が強く、今回、少し足りなかった感が強い。刺激飲料（コーヒー・紅茶・緑茶・酒類）は、海外遠征の場合には、体力以外に、気を使う故、体力の消耗が激しく、これらに対する欲求は大変強く、今回、不足勝ちであった。

(三)、輸送、パッキングについて

遠征の場合、入山する迄の日本出航からのアプローチが長く、その間における食糧の変質、破損が心配されるが、今回、大部分、インスタント食品等の使用の為、又、二重のダンボールパックの為、何ら支障をきたさなかった。

しかし、山岳地行動中、特にポーターに頼んだパックは、扱いの荒さと、裸で持つ為、ダンボールパックは不十分である。特に雨の場合は通用しない。

又、食糧の小パックに於いては、今回、十一日の山行故、レーション・システムは取らなかったが、やはり現地において、毎食事ごとに、多くのパックを開く不便があった。今後の遠征には、レーション・システムの導入が必要である。

(四)、その他

現地食糧の研究は、今回行って行ったが、やはり十分ではなく、現地において、大変便利な食糧が多くあった。

以上、結論として、遠征の場合には、遠征地の特殊事情、隊員構成を十分考慮して、量よりも質に重きを置くべきである。

2. 装備係

浮田陽右

装備計画立案に当っては、まず台湾そのものの持つ風土的特性、特に、我々が遠征を行う十一月における山の気象状態を考慮して、それらの資料を元に、日程・コース・人数等から最も合理的、ムダやムリのない計画が立てられなくてはならない。むろん今回は、我

が部始まって以来初めての海外遠征であり、ワンダーフォーゲルとしての特徴を遺憾なく海外においても発揮するために、女性を加えた多彩なパーティであるということ、そして親善をも含めた縦走形式をとったということ、それらの事が純装備計画にも反映されざるを得ないことは云うまでもない。しかし資料や話しによるだけのもので、実際に調査を行ったわけでもない、我々にとって全く未知なる海外の山にでかけるのであってみれば、いろいろな面で完璧をきし難く、国内における合宿を参考基準にして計画そのものを立てざるを得ず、万全を期したつもりでも多少の不安は残った。そして、実際に行動してみて、想像してはいたが、日本と全く異なる自然環境、予期以上にめぐまれた山の気象的地理的条件にでくわし、未開拓であるが故に問題はあるが、かえってそれだけすばらしい経験を、台湾の人々と共に味わうよろこびを持つことができたのである。

以下、断片的ではあるが、個々の装備に関して気のついたことを述べてみたい。

A、テント

台湾の十一月の山の気象は、台風期でもなく、雨期でもない、さらに三千米以上の稜線上では、すべて雲海の上の出来事であり、下は雨でも上は晴れといったケースが多く、我々の場合、毎日好天の連続であった。

昼夜の気温差こそ、はげしい時は真夏と厳寒の差こそあれ、森林限界はおそらく三千四百米以上であり、どこにいっても従って薪に不自由することはない。さらに遠征隊の限られた日数では、ケモノ道、あるいは猟の道しかない未開発の台湾の山では、ポーターなしではルートをみつけることは不可能といっていいので、ポーターを雇うものとすれば、我々についてきてもらったピアナンのポーターをとっていえば、仮小屋なんかでも実にすばやく、簡単に建ててくれるので、この時期、この状態での山行なら、テント・ラジウスを持っていかなくても、少人数精鋭パーティなら十分行動可能であり、かえって機動性に富んだものにできるといえよう。ただ今回の我々の場合には、台湾の人達にはそんなものは送り返えせばいいと云われたけれども、女性、OB・OGをも含んだ　多人数、初めての海外遠征で慎重を期さざるを得ない関係上、軽量化への対策を怠ってはならないが、持っていって当然であるといえよう。又　我々の経験だけを楯にとって、他の人々にテントはいらないとすゝめることはできない。ただ

し、ポーターの人たちのためのテントは、よほどの風雨でもこない限り不必要、あの人たちは寒ければ寒いほど焚火の側を離れようとしない。だが親善上の当然の礼儀として持っていった。

B、ラジウス

ポーターは、まずテント場に着くと火を燃す。そしてその火で食事をつくり、その火を囲んで談笑し、その火のまわりにゴロ寝する。従って一晩中、ポーターの居る限り火は燃えているので、朝も国内での合宿のような食当の不便はなかった。従ってウチワは一度も使わず。ペトロマックスは火力が弱いが、火力の強力なラジウスは何かにつけて便利であった。

C、石油（今回遠征の現地買付は石油のみとした）

八日分として十リットルを持っていく。一ℓ四時間として、一日五時間、従って、全行程雨が降っても大丈夫なだけの量を準備していったわけだが、好天にめぐまれ六ℓ余る。それでも、お茶をわかしたり、暖房に使ったりで、一日二時間の消費はしている。

一度水不足のとき、ポーターの一人が水とまちがえて、ポリタンの石油を飲んで下痢したことがあるので、よほど暗闇でも、色だけでなく、手触りでもわかるようにはっきりした区別がほしい。

D、鋸・鉈

ポーターが、これほどよく働き、役に立ち、強力であるとは予想もしていないことだった。我々はただボッカのために、彼らを頼んだにすぎないのに、彼らは新人の如く荷を背負い、さらに三年部員の如く、その荷でルートハンティングをし、藪をはらい、道をつくり、危険なところはちゃんと待っていて導いてくれ、テント場に着けば薪をとり、火を燃し、整地を行い、水をくんできてくれ、その間、不平一つ、文句一つ、いやな顔一つするでなく、実にもくもくと、卒先してそれだけのことは必ずやってくれた。それは本当にりっぱな、もはや我々にとってよきガイドであり、親しい山仲間以上のものとなった。特に、男のポーターが一人一人持っている彼等特有の蛮刀は、極めてその用途たるや多彩であり、切れ味よく、美しく、笹でも樹木でも、料理にでも何でも使え、彼等の生活資料の大なるものとなっている。従って、我々のもっていった鉈の如きは全くその影をうすくし、ついに一度も日の目をみるに至らなかった。

E、鍋

最初、幕営地がすべて三千米以上の高所ということで、高圧鍋を購入する予定であったが、予算、重量、容積その他、適当なものが市販されていないため、又食糧ではすべて、α米、乾燥野菜、干肉、ソーセージ、コンビーフ等を使い、生まものはあまり使わない献立であったため、普通、部の合宿で使っているつるのついた木蓋の中鍋を持っていった。そのための特別な不都合はなかったが、ちょっと蓋をおさえるように工夫すれば、即席の高圧鍋ができたと思う。

ポーターの人たちは各自飯盒を使って炊事していた。

F、ザイル

台湾の山は岩稜が多く、特に我々のコースとしては大覇尖山に使うために、特別準備していったといっていいのであるが、大覇尖山そのものが、極めて厳しい、断崖絶壁の、しかも岩質の脆い独立峯であるにもかかわらず、狭い岩柵を伝い、針金で確保してあるあぶなっかしいこわれかけた梯子に、三ヶ所ほど頼って登ってしまえば、何とかあとは草付きの急斜面にでて、スムースに頂上につけるので、上に丈夫な樹が生えていたにもかかわらず、アップザイレンなしで強引に降りてしまった。大覇尖山の岩質は非常に脆く、ハーケンも役に立たないが、時間節約と、確保のためにもアップザイレンは必要である。下からはみえないが、梯子を昇った右上の斜面にひとかかえもあるような樹がいっぱいはえている。

なお捨縄兼用として、各自丈夫な細引を六米づつ持っていった。

G、ピッケル

大覇尖山の裏をまくときに氷がはっているということで、持っていった。しかしこれも下をまいて通れば大したこともなく通れるし、実際は、藪こぎに苦しむだけで、後はシャベル代用か、旗竿の代りになったくらいである。

H、炊事具

洗剤としてライポンを持っていく。これは台湾の水がよくないということと、油ものを洗うために持っていった。実際、水が少くて時間のないとき、又、夜遅くついて疲れているときなど、これがあると気分的にずいぶん楽くである。

タワシ・お玉・しゃもじ・庖丁・食器などは、消耗

品で、一番紛失しやすいもの。
罐切りもガッチリした大きいものが役に立つ。

I、ローソク・懐中電灯

懐中電灯をいざという時のために保存しておくためにも、ローソクはもっとゆとりをもたせてたっぷり持っていくべきだった。実際は、記録や日誌をつけるのに懐中電灯を使って、そのためにずいぶん電池をムダにしたようだ。行動中、その他にしろ、やはりヘッドライトが一番強力で便利である。

J、修理具・サヴザック

何よりも事前の精密・完全な点検・修理が才一。テント・ラジウス・ナーゲル・その他。

長い山行でダンボールが不足しているとき、サヴは結構重宝なものになる。ガラクタ・食器・ザイル・野菜その他を入れることができる。

K、ポリタン・ハンゴウ

水が、遠くへくみに行かないとないかもしれないという予想のもとに、隊員各自二ℓづつ、現役のみ四ℓ、計三〇ℓ分のポリタンを用意していった。

実際には、いちいちポリタンの小さい口を通して水を入れ、再びその口からだすというめんどうな操作が必要なため、何か水をたくさん入れて一度に、持ち運びできるものを事前に考案しておくべきだった。

ハンゴウは現役のみ、計六バツを持っていく。

L、純個人装備

個人装備についても、必要最少限度のものは係として、メンバーに指定し、徹底させたわけであるが、如何に団体装備の軽量化に苦心しても、各人が個人装備において余計なもの、不用なものを持っていったのでは何にもならないのであり、そうした点で、係はもう少し権限をもって個人装備の軽量化についても責任をまっとうすべきであった。まして、怪我や病気で、自分の荷物を他の人に持ってもらわなくてはならない場合、又は、持たなくてはならない場合に、それではバランスが保てなくて困るからだ。しかし、ここではそうした点は良いとして、台湾で感じたことのみをピックアップしてみると。

イ、帽子

十一月とはいえ、台湾では太陽がでていれば真夏と

同じである。カンカン照りで、大した準備をしていかなかった我々は頭がおかしくなり、ムギワラがほしかった。ヘルメットは軽くて、落石防止にもなってよいかもしれない。

ロ、服装

従って行動中の服装は、ポロシャツ、ニッカーで、ニッカーホースなしで十分であり、これに軍手、脚絆をつければ、台湾の矢竹は柔軟なので、藪こぎも可能である。さらにウールでない長袖を一枚もっていればよかろう。

ハ、防寒具

昼夜の気温差、日中でも日向と日陰の差、がはげしいが、各自ウール、ウールカッター一枚くらいでまにあう。キルティングまでは必要としない。ラクダのシャツ上下もシュラフにもぐっていれば要らない。

ニ、エアーマット

ポーターがどんなところでもちゃんと整地して、十分笹をしいてくれるので不必要。もって歩いても重いだけ。

ホ、雨具

ポンチョ形式の軽いものがいろいろ使えて一番便利である。団体装備のフライ代用、寒いときは、テントに寝たがらないポーターの人たちの寝具に、夜露がおりないように貸してあげたこともある。

以上、いろいろ断片的に述べてきたが要するに、装備計画に当っては必要最少限度のものを、ガッチリおさえた上での軽量化ということが一番重要なポイントとなる。しかし海外に遠征する場合には、最初から必要最少限度を持ってでるのでなく、あらゆる場合を考慮に入れて、少しでも必要と思はれるものは、資金の許す限りすべてもっていくことだ。外地で必要に気がついたからといってそう急にはなかなか手に入るものではないし、十分もっていってあれば、山に入る際に必要なものだけを選別できる柔軟性がでてくる。そして、その方がどれだけ気分的に楽かわからない。しかし今回、このことが必ずしもうまくいったとは思はない。海外遠征の初のテストケースとしても、いろいろ不十分な点が多かったことを反省している。

3. 医療係

橋本　孝子

一、対策

行動は山地と平地とに分けられるが、係の仕事は急救法である為、平地は各地の医療機関を随時利用する事とし、山地を重点的に取上げ対策をねった。

毒蛇は南方山岳地帯に特に多く、夏は行動不可の所もあると言うが、十一月中旬でもあるので血清は用意しなかった。高山である事、不馴れな土地と気候等に対して、特に保健薬を沢山用意し、速効を目的として綜合ビタミン液・ビタカンファーの注射液・強肝アンプル液を用意した。毒虫も多いと考え、BHC・防虫軟膏、噴煙式防虫薬を用意した。更に十日以上の山行である為、抗生物質、サルファ剤を多目に用意し、その他、国内の合宿で使用する薬品を日数・人数に合せて計画した。

個人医療としては持病薬・三角巾位とし、各隊員の掛り易い病気・持病・アレルギー性、等を考慮した。全隊員は健康診断を受け、障害の有無を確めた。

二、検討

各種ビタミン剤を団体医薬として、毎晩配給した。全員が忘れずに服用する意味に於て、又一日一日の健康状態を知る上にも良い方法と思う。特に食糧の軽量化による偏食には、ビタミンC、綜合ビタミンの効果が期待された。

山に入る前の身体と精神の休養、調整は、山中でのコンディションを保持する上にも重要な事である。今回は、平地での一人の風邪が山行中全員に次々とうつり、隊員のコンディションを乱した事は失敗であった。

疲労回復にビタミン注射を併用したが、清潔な水が得にくく、消毒用アルコールが不足気味であった。器具、手の消毒に充分なだけの量を持って行くべきだった。アルコールは飲料に出来る方が望ましい。

御同行下さった台湾山岳協会の方の疲労と高山病に対する、ハームイ・竜眼の蜂蜜・仁丹系薬品・朝鮮人参の利用、生姜と黒砂糖を煮たてゝ服用する等、医薬品面と共に、気分をほぐすようなこれらの方法は、参考になった。

医薬品を提供して下さいました日紳KK、東京田辺製薬KK、才一製薬KK、武田製薬KK、塩野義製薬KKの皆様、毒蛇に関して御指導下さいました東京伝染病研究所の皆様に、深く感謝致します。

2　持参の医薬品目と、使用量及び使用回数

用　途	品　名	量	使用量	回数
消化剤	胃腸薬東京田辺	75pack	70パック	
菌性胃腸薬	エンテロビオフォルム	40Tab	30Tab	
鎮瘧剤	ババスコ	30Tab		
鎮痛・解熱剤	ナルゲモン錠	60Tab	40Tab	
鎮痛剤	セデス	30Tab	10Tab	
綜合感冒薬	強力チミコデ	165Tab	100Tab	
鎮咳剤	デミオン	30Tab	6Tab	
鎮静剤	アトラキシン	24Tab		
抗ヒスタミン剤	レスタミン・コーワ	100Tab	20Tab	
保健薬 V B_1	アリナミン	350Tab	350Tab	
V C	パンシー錠500mg	25Tab	25Tab	
〃	〃　制剤2g	15pack	15pack	
〃	ハイシー	50Tab	50Tab	
綜合V	ポポンS	100Tab	100Tab	
〃	ビタプレ	200Tab	120Tab	
〃	ミネビタール	100Tab	100Tab	
強肝	パント錠	40Tab	40Tab	
〃	ゴルフ	4アンプル	3アンプル	
止血剤	アドナ錠	30Tab		
サルファ剤	レダキン	30Tab	12Tab	
抗生物質	アクロマイシン	20Tab		
注射液	ビタカンファ	5×1cc	1×1ee	
〃	メタボリン	10×2cc	9×2ee	
健胃剤	ホミカロート	100Tab	40Tab	
強心剤	テオユリン	30Tab		
軟膏，油	ペニシリン軟膏	5g		
〃	サルファ軟膏	10g		6回
〃	ドミアン軟膏	12g		2回
〃	プラグマンージェリー	25g		
〃	チンク油	100g		
消炎剤	三共パップ	390g		4回
〃	サロメチール	75g		2回
点眼薬	ロート目薬	20ml		数回
乗物酔	トラベルミン	60Tab	36Tab	
殺虫剤	バルサン	40stick		
防虫軟膏	リッペ	36g		
殺虫剤	B.H.C V P リンデン	100g		
ホルム散	ホルムス	11g		
消毒薬	オキシフル	100g		数回
〃	マーキュロ	25g		
〃	リバノール液	50g		数回
〃	アルコール液	100g	100g	
	ベンジン	100g		数回
	磷酸	少々		

気象報告

塚崎義樹

一、計画

気象係の目的として、台湾の天候の特徴について知る事、我々の山行の安全を計る為に気象観測をする事、後々の資料として、観測記録をとる事であつた。まず各方面に資料の収集を計り、事前研究を行う。次に次高山近辺の局地気象を知り、日本短波放送により、天気図を作製する。そして、天候、気温、雲量、風力風向を記録する。

二、現地での気象

我々が現地で行動したのは十一月九日から十二月三日迄であつたが、台湾北部ではこの頃から雨期に入り始める。毎日雨雲が空をおゝい、時折、小雨がパラつき、肌寒い日々が続く。我々が滞在した頃は、台北気象台の話によると三寒四温との事で、晴れ間も時々出る程度であつた。南部では嘉義を通る北回帰線を境に北部のそれとは逆で、これから乾期に入る。熱帯らしい澄んだ青い空に太陽の強い光線に充ちてさすが南の島に来た感じがする。山は毎日晴天が続いた。十二日に台北を出発し宜蘭を経てピヤナン社へ十三日に着く頃は平地で降つていた雨もやみ晴れ間が出て来た。ピヤナン社附近は毎日午後三時頃から山から降りて来たガスにつつまれ急に冷え出す。土地の人はそれ迄乾していた洗濯物をさつさとしまい込む。我々は十四日から山路をたどり始めたが、この頃、大型の台風二十八号が台湾に接近して来た。期待していた日本短波放送が入らず天気図作製が出来なくて台風の接近を知らなかつた。十五日キャワン渓からシンタへ行く日は良く晴れて太陽が暑い日であつた。幸いにも、台風は台湾上陸寸前で方向を北に変え、十六日には関東の南部を通過した。台北気象台の話によると大陸の高気圧が張出し始めると天気が悪くなり、高気圧の中心が過ぎる頃から天気が良くなる。台風が台湾をそれた頃、華中に大きな高気圧があり、山では晴れて風が冷たかつたが、下界では毎日雨模様の天気だつた。稜線では日中と夜の気温差が激しく、二十度近く差がある。夜は氷点下に下り、池の水が凍つていた。山岳地帯は平地とはうつて変り、ここが雨期に入つた台湾北部の山とは想像もつかぬ位二十一日迄十日間晴れ通した。下山して台北に帰ると、再びうつとおしい天気の毎日が続

き、気温差も僅かで平均二十度前後であつた。二十三日以後、我々は平地部の行動に入つたが、湿度高く、カラリとした日はなかつた。そろそろ雨期が近づいた為であろう。以上が我々が台湾で行動した頃の気象の概況である。

三、反　省

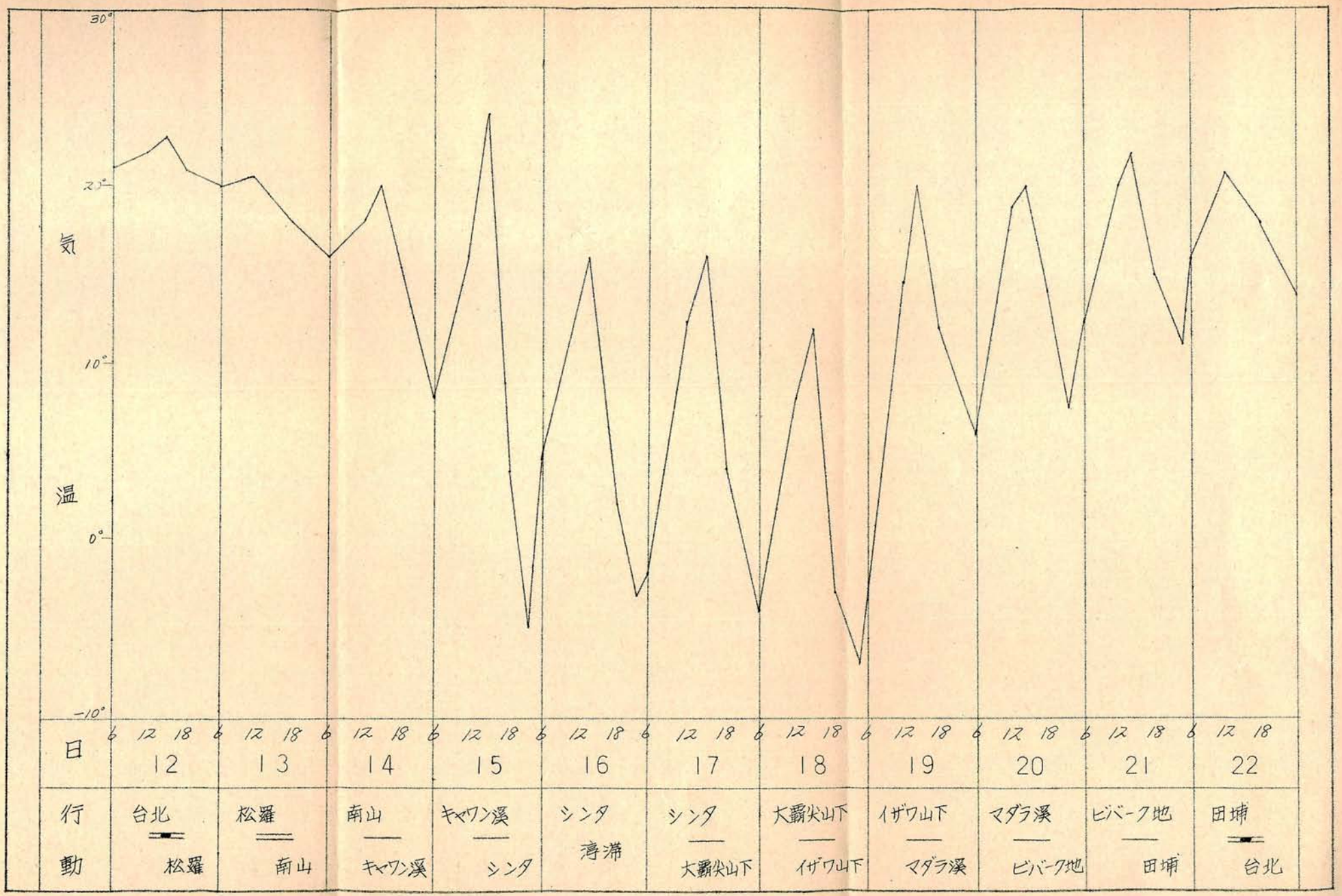
まず資料は気象台、図書館、観光案内等で集めたが、精確なデーターが得られず山岳地帯の局地気象を知る事が出来なかつた。次に日本短波放送がキャッチ出来ず、天気図が作製出来なかつた。以上の点が我々の期待に反し、山岳地帯の天候については台北気象台の資料及び観天望気によつた。山では気候に恵れ、快適な山行を楽しめたが、台風接近を知らず、この事を下山後聞いて、心胆寒からしめた。台湾では気象通報を軍事機密として行わないが、天気予報はするので、北京語の判る者が同行すると良い。総じて不測の点が多く、気象係として日本の様に働けなかつた。今後、台湾において日本の登山団体が多く活躍するであろうが、天気図作製について、一考を要すると思う。まだ山岳地帯の局地気象については、今後とも資料を残す必要があると思う。

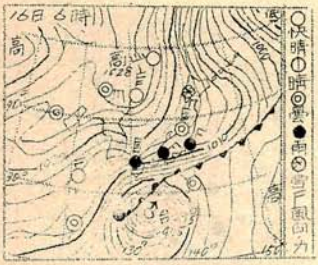
日	天気	気温 6:00	12:00	18:00	最高	最低	雲 雲量	雲形	風 風力	風向	行動
12	●のち◐	21℃	22℃	21℃	23℃	20℃	10	乱層雲	1	西	台北＝宣蘭＝松羅
13	◐	20℃	20.5℃	18℃	21℃	16℃	9	乱層雲	2	北東	松羅＝南山
14	◐	16℃	18℃	15.5℃	20℃	15℃	8	層雲	2	北東	南山—キヤワン渓
15	◐	8℃	16℃	4℃	22℃	−5℃	3	層雲	3	北北東	キヤワン渓—シンタ
16	○	5℃	16℃	2℃	16℃	−3℃	0		4	北西	シンター停滞
17	○	−2℃	12.5℃	4℃	16℃	−4℃	0		4	西北西	シンター大覇尖山下
18	○	−4℃	8℃	−3℃	12℃	−7℃	0		4	西	大覇尖山下—イザワ山下
19	○	−2℃	15.5℃	12℃	22℃	−2℃	3	層雲	1	北西	イザワ山下—マダラ渓
20	◐	8℃	21℃	14℃	22℃	7℃	4	層積雲	0		マダラ渓—ビバーク地
21	○	12℃	22℃	15℃	24℃	9℃	0		1	北西	ビバーク地—田埔
22	●のち◐	16℃	21℃	18℃	22℃	14℃	5	乱層雲	3	北西	田埔＝新竹＝台北

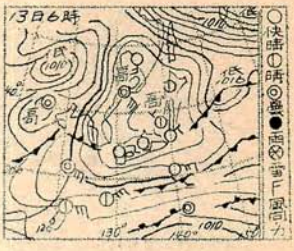
日	天気	気温					雲		風		行動
		6:00	12:00	18:00	最高	最低	雲量	雲形	風力	風向	
23	⦶	18℃	23℃	20℃	24℃	16℃	4	乱層雲	1		台北
24	⦶	20℃	24℃	21℃	25.5℃	20℃	5	層雲	2		台北
25	⦶	22℃	26℃	24℃	28℃	21℃	3	層雲	0		台北—円鳳山—台北
26	◎	20℃	22℃	21℃	23℃	20℃	10	層雲	3	北西	台北
27	雨のち⦶	21℃	23℃	22℃	26℃	20℃	8	乱層雲	3	北	台北＝高雄
28	⦶	20℃	24℃	21℃	26℃	18℃	8	乱層雲	5	北西	高雄＝清水
29	◎	20℃	22℃	19℃	25℃	17℃	10	乱層雲	6	北西	清水＝台中＝台北
30	◎ときどき雨	18℃	20.5℃	19℃	21℃	16.5℃	10	乱層雲	1	北西	台北
12月1日	雨ときどき◎	18℃	19℃	18℃	19℃	17℃	10	乱層雲	1	北西	台北
2	⦶	18℃	18.5℃	17℃	19℃	16℃	5	層雲	2	北	台北
3	⦶	17℃	18℃	16℃	18℃	16℃	7	層雲	2		台北＝基隆

5－3図

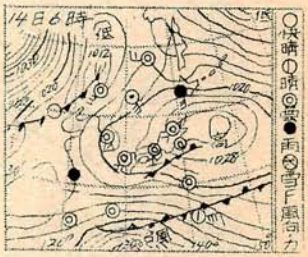
気温グラフ


30°
20°
10°
0°
−10°
気温
日
6 12 18
12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22
行動
台北 松羅
松羅 南山
南山 キャワン溪
キャワン溪 シンタ
シンタ 滞滞
シンタ 大霸尖山下
大霸尖山下 イザワ山下
イザワ山下 マダラ溪
マダラ溪 ビバーク地
ビバーク地 田埔
田埔 台北

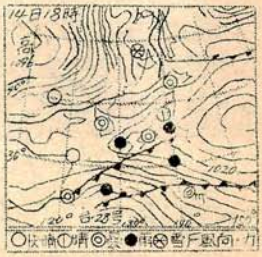

16日 6時
○快晴 ◐晴 ◎曇 ●雨 ⊗雪 F風向 力


13日6時
○快晴 ◐晴 ◎曇 ●雨 ⊗雪 F風向 力

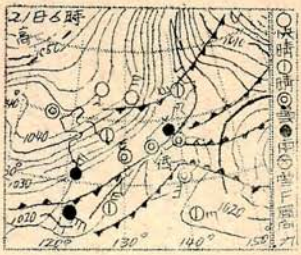
18日18時
○快晴 ◐晴 ◎曇 ●雨 ⊗雪 F風向 力


14日6時
○快晴 ◐晴 ◎曇 ●雨 ⊗雪 F風向 力

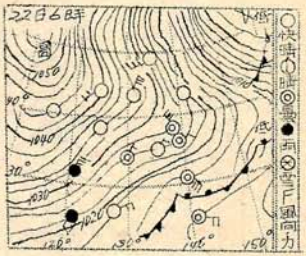
20日18時
○快晴 ◐晴 ◎曇 ●雨 ⊗雪 F風向 力


14日18時
○快晴 ◐晴 ◎曇 ●雨 ⊗雪 F風向 力

2月18時
○快晴◐晴◎曇●雨⊗雪F風向・力


2月6時
○快晴◐晴◎曇●雨⊗雪F風向・力

26日18時
○快晴◐晴◎曇●雨⊗雪F風向・力


22日6時
○快晴◐晴◎曇●雨⊗雪F風向・力

30日6時
○快晴◐晴◎曇●雨⊗雪F風向・力

28日18時
○快晴◐晴◎曇●雨⊗雪F風向・力

5. 記　録

並木　睦枝

二、三日のワンダリングでも、二十日間の合宿でもそれを記録し、反省しその記録を保存することは、いつの時にも重要なことである。

今回、初めての海外遠征にあたり、我々は、その準備、実行動においてそれなりにベストを尽した。

それでも幾多の欠陥がなかつたわけではない。

我々は今回の遠征の全てに関して、それを記録整理することによつて、次のよりよき飛躍への備えとしようとするものである。

一、準備段階

計画の進行過程と準備会の記録

二、実行動

イ、行動記録（記録係が行う）

ロ、各係の記録（各係が行う）

ハ、隊員日誌（隊員が主観的立場からの見聞や感じたことを自由に記す）

三、記録の整理、保存

なお、海外遠征の場合、国内、現地を通じて非常に多くの方々に接し、その好意や援助を受るが、特に行動中、とりまぎれて記し落すことのないよう注意しなければならない。

6. 写真係

熊谷　辰二

当遠征は我部に於て最初の試みであり、その遠征内容を伝えるに最も明確な手段として写真の責任は大きいものであつた。それ故、単に記念写真として撮るのではなく遠征の準備段階から、実行段階、そして終りまでを一つの流れのうえに現わせるように、即ち、組写真をつくり上げるように計画、準備しなければならなかつた。

一、撮影計画

イ、隊員ポートレート

ロ、準備風景

ハ、出　発

ニ、船　中

ホ、上陸後の行動、風俗、風景

ヘ、帰　国

二、撮影者

イ、山地班　スチール　一名
　　ムービー　一名
ロ、平地班　スチール
　　ムービー　兼任　一名

三、カメラ

スチール写真用は重量、容積の軽減、機動性の点から全て三十五㎜専用カメラとする。

㈠山地班
イ、黒白用　一台
ロ、カラー用　一台
ハ、望遠専用　一台
ニ、予　備　一台
ホ、ムービー（八㎜）一台

㈡平地班
イ、黒白、カラー兼用　一台
ロ、ムービー（八㎜）　一台

四、アクセサリー
イ、三　脚　一台
ロ、広角用レンズ　一個
ハ、望遠レンズ　一個
ニ、露出計　二個
ホ、フラッシュガン及びバルブ
ヘ、ダークバック一式

五、フイルム

	準備数	使用数	残数	感度
黒白	五十	三十八	十二	百
カラー	二十五	二十	五	五十
ムービー用	三十五	二十九	六	二十

六、反　省

イ、山地内の行動については充分に撮影してあるが、市内の生活風景を充分に撮影しなかつた事は、その国を紹介、説明する意味に於て失敗であつた。

ロ、八㎜ムービーの担当者が山地、平地とも他の仕事を兼任していた為、満足な活動が出来ず撮りこぼしのあつた事は、反省せねばならない。

ハ、各種アクセサリーは夫々大いに役立ち、特にフラッシュガン、ダークバック、広角レンズは利用価値が高かつた。

ニ、フイルムの準備数は、スチール用は一日当りの本数から、ムービー用は時間から割り出したが結果から見て充分であつたと思う。

ホ、全体的に見て初期の計画の八十パーセントは達成し得たと思う。

7. コース係

佐々木　惇

今回の遠征は、準備期間が短期であつた為、充分な資料集めと、研究を尽すことが出来なかつた。

コースの検討は、旧日本陸軍の五万分一の地図を中心に、西丸氏、台湾山岳協会、秋田大学、同志社大学の厚意に依り、記録をお借りして参考とした。

我々が最・細心に考慮しなければならなかつたのは、外地に於けるワンダーフォーゲル実践の方法であり、その場の選定の規準であつたが、先づ幾つかのモデルコースを設定し、その各個について検討を行つた結果、大覇尖山を横断する、縦走形式のコースを最終的なものとして確認したのである。

台湾山地、と云つても大覇尖山周辺であるが、幾つかの内地の山地との相違点を挙げることが出来る。

台湾の中央山脈は、三千を越す山峯の連続であるがひどくのんびりした山様を呈している。それは森林限界の高さに由来するのである。三千位の稜線でも、針葉樹が茂り、三千五百を越える大覇尖山頂直下でも喬木を見ることが出来る程である。内地と千米の差はあると思われる。その為稜線を二百米も下れば、水を得ることが出来、溜り水も使用に耐える程度のものは要所に散在しているから、それほど水には苦しむまい。

山路は、本来山地の人が狩に使用するもので、踏み跡程度のものがついているにすぎない。路のつけ方は捲き道が非常に多く、しかも忠実に等高線を捲いているから、内地の感覚で地図を読むと思わぬ長丁場に泣かされる。

又苦しめられるものに矢竹がある。背丈を越える強靭な弾力の襲撃は、体力消耗させること夥だしい。竹の中に入れば、眺望はおろか、先行者の姿を失う程の猛烈さで、二尺四寸は苦労する為の道具でしかない。

我々の通つたコースには大覇尖山以外、岩場はなかつたが、シミタ、ポチンプシロン、パサラユン等の稜線には豪快に落ち込む岩場が望見された。大覇尖山の岩は非常に脆く、逆層で、若し樹林帯がせり上る今の登路が無かつたなら、登攀は全く至難である。勿論、ハーケンも打てず、ホールドも頼りなく落ちるのである。　以上が我々のコースで見た台湾山地の特徴である。山岳地の未開拓から、アプローチが長く、今回の様な縦走を行うには、長期のキャラバンが必要であり、それ故、ワンダーフォーゲル活動の場は、未だ幾らでも提供してくれそうである。

最後に、外地の状態は、内地で予想したものとは随分変つて来るものである。コースの検討はいくらでも時間をかけてしなければならないが、それで充分とは決して云えない。細心の準備と、現地調査こそ、将来の大遠征には必要であろう。

8. 渉外係

木村和巨

今回の台湾遠征における諸事、雑役に関する行動を範囲を限定し、査証、出入国手続、船舶航空、保険にまとめ、簡単に記したいと思う。

査証、ビザを入手する際、我々は台湾省山岳協会の招聘にもとづき、日銀をへて外務省発行の旅券を入手した。その旅券に査証の印を押してもらうのだが、我々の場合、三ツの場合が考えられたと思う。第一は招聘状に基き隊員の必要書類を添えて、日銀に提出し、外貨審議会の承認を経た後、外務省から発行される旅券にしかるべき書類（メンバー表、謄本、山岳協会よりの書類等）を添えて、中国大使館に提出し、その後書類が本国に帰り、当地での審査を経て、再び日本の中国大使館に帰り、そこで査証の交付を受ける。第二は、我々は特にこうすべきであつたのだが日銀に書類を提出すると同時に東京の中国大使館宛に、山岳協会よりの保証書等に我々の書類を添えて、提出し、中国における審査を経て後、我々は外務省よりの旅券を持参する事により、旅券に査証の印を押してもらう方法である。第三は台湾省山岳協会に、中国における一切の手続を依頼し、中国における手続の完了を中国外交部より日本の中国大使館の通告により旅券にその許可の印を受ける方法である。我々は、期日の関係から、非常に、その功をあせり、又、知識の欠如から、第三番目の手法に期待したのだが、山岳協会側との連絡の不統一、不備により、山岳協会の方々の考えていた第二の手法と大きくくい違い、我々がひどく、苦労した事は、多いに反省すべき事である。我々はしかる後に日程の関係から、観光査証で入国し、入国後、その延長をしたので、査証に関しては、我々は首尾一貫、苦労した。思うに、遠征に際しては、相手国の事情を正確に把握し、しかるべき手続の順序を確実に踏む事の重要さを痛切に感じた次第である。なお今回の手続に関し簡木桂氏、横尾氏、横間氏、参議員議員青柳氏に多大の御援助、御指導を受けた事を記したい。

出入国手続、旅券、査証に関連し、外国へ行く際、必ず必要なイエローブックを保健所或いは規定の病院

より、しかるべき検査を受けた後、交付されたらパスポート、イエローブックに基ずき、出入国の手続をそれぞれの空港ですれば良い。これは大体簡単だし、特に我々は、同和海運、関西支部OBの積極的援助を受け、日本の出入国は全く問題がなかつた。しかし、外国の場合は、国情により違う点を留意し、特に査証の延長などした場合、居留証明等、注意を要する。

「船舶、航空」台湾に行つている船は、中国招召局、台湾航業公司、関西汽船、新日本汽船、三井船舶等あつたが我々は費用と期日の関係から、同和海運の御好意により、台湾航業公司の台東輪に乗せて戴くことになり往復とも、この船にお世話になつた。飛行機は数多くあるのでこの点では全く問題はなかつたが、日航はとも角、外国航空会社の場合は、充分なる注意を要する。というのは慣習とか考え方が必ずしも日本と同一ではないし、我々の考えている事との意志の疎通が完璧ではないということである。

「保険」　日本の出国時点から中華民国への着地までの物件と中華民国入国から出国までの傷害にしぼり費用の点から、その二件だけ、保険をかける事にした。だが出来得れば、全ての物件に出国から帰国迄、又傷害保険は特に、全期間中かけるべきではないかと思う。唯だ物件の場合、団体だと価値評価額が複雑を極めるので一定の金額にまで個人の場合は押え、団体装備等は正確なリストを作成せねばなるまい。

以上大体簡単に記したが、その他、中華民国の場合は、入山許可証が必要なのだが、これも、山岳協会の御好意で全く問題なく、簡単に入手できた。又、現地での種々の問題も台湾同学会、山岳協会の御好意で何の苦労もなかつた事は、今回の遠征の特徴としてあげられるであろう。

9.　会計係

富井　道子

今後の資料の為に反省を含めた会計の手順及感想を述べよう。

予算は、その団体旅行のメドにもなる為、慎重に組まれる必要がある。

一、準備として

1. 日程表からの予算
2. 品目別予算　㋑国内必要分（含帰国後）
　　㋺国外必要分

これらの予算を組む為に基礎となるのは、相手国のレート、物価水準等である。幸い此度は、山口氏の事

前訪中により、相当程度、正確な予算がたてられた。又、特にどんな事態が起り得るか予測出来ぬ外国の事とて、予算全体は比較的余裕を持たせ、予備金は多目に計上された、中に小遣い等、全くの個人分も、始め様子の察しがつく迄、予備金の一部とした位である。

二、予算を使つてみて

日程表による予算はその予算の正確さが判断しやすくて、その後の予測に役立つた。

品目別予算は正確であつたためと物価が安かつたため、ほとんど余裕があつたが、その割りに渉外費、及び通信費の必要とされたことは、さすが内地と異つた点であつた。

三、注意事項

○記帳は必ずその日の内に複式簿記法で完了し、残金との照合迄すべきである。

○その国のドル事情を調べる必要がある。例えば、台湾で米一ドルは四〇元であるが、公定以外は四七元の価値を持つ事、又持込んだドルは元にした銀行証明があれば帰国の折、又ドルに変るはずであるが、それは一人二百ドルまでで、団体の証明でもない限り、例外は許されない事等。

○小遣い等、記帳の別なものは、始めから別会計でした方が技術的に楽である。

四、帰国後の整理で

整理は、気が抜けるのと忘却する率が多い為に、少なくとも十日以内にやるべきであつた。

遠征に寄せる

スイスにおける或る休日

芳野武雄

昨年の七月八日の午後四時自分は観光団スイスの岳村インターラーケンのグランドヴクトリアユンゲフラウホテルという山鳥の尾のような長い名前を持つたホテルのフロントの前に立つた。（インターラーケンは人口八千位で、ホテルが百近くもある仙境である。）

所定の書込みを終了して、ボーイの案内で室へ入りキーを受取つて、ソファーに腰をおろした。

すぐ前方でごく前面にユンゲフラウ（四、一五八M）を中心として、いわゆる欧州アルプスの一端が手に取るように見える。左からウエッターホルン、アイガーメンヒ等

過日チウリツヒからローマのレオナルドダヴインチ空港へ飛んだ時、機上から遥かに眺めたときは白一色の連山で、雄大、荘厳という感じに打れたが、いまここで観る山容は何んと表現してよいか、直ぐには言葉にならない程の感激を憶えたのである。

冷酒をコツプに一杯ついで、一口に飲み乾した時はたゞスウーとするが、やがてホカホカしてくるのと同様にやつと山の姿が分つてきた。

今にもつかみかゝらん様に迫つてくる。

雲の去来につれて、山の形態が千変万化する。光線の具合によつて色彩が万華化する。

漢文調なら頼山陽、とくに山岳美の形容なら井上靖や新田次郎の才筆が必要と思うが、たゞ漫然と何んの修辞も加えないで、無心に、時と場所に渾然一体となつて融け込んであかず眺めたのである。

約一時間服を着換えるのも忘れ去つてうつとりとした。

明くれば九日、六時起床して朝食もそこそこにして軽便鉄道に乗つて途中三回位乗り換えて、Grosseーfaulhorn に着いた。

よくスイスでは街の中には日本人には会はないが、登山電車の中で会うといわれているが、その日も十四人の邦人に会つた。

途中の大景観はバイロン郷の天才の筆をも折らしたというがたゞたゞ自然の偉大さに感嘆するのみであるとの一語につきる。

しかし三千四百五十四米のヨツホをくり抜いて自然を征服した機械力の偉大さ、計画性のち密さ、その労

力は高く評価さるべきものである。

やがてヨツホから頂上まで四千百五十八米をくり抜く計画が進行中であるという。

丁度ヨツホの停留所のある食堂へ、ドイツのワンゲルの若い男女の一行が、「アイン、トウヴイ、ドライ……トウエル」と声高く歩調を取つて、整然と登つて来た。若きエネルギーにはユングフラウの万年雪もとけて流れる様に思われた。

帰途はアイガーの壁に目をみはり、ツエルマットと共にスイスの美しい山の小村として有名なグリンデルワルドを経て夕方、チウリツヒに帰つた。

暮色は街を覆い、ペスタロツチの小さな銅像の影が長く通りまで尾を引いた。

（筆者は顧問）

早大ワンゲルの旗をかざして

川崎隆章

青年は常に向上を目指し、一つの段階に停滞することを好まず、未開の扉を叩こうとする意欲に燃えているものである。もしこの精神が、青年層に流れていないならば一国の盛衰は推して知るべきである。世界を流れるエキスペディシヨンは、このような盛りあがりから、発つし、生きる甲斐ある人生を感得し、謙虚にして、人を愛するヒユーマニズムに発展するものである。

我々早稲田の校風を慕つて入学し、その雰囲気のなかに育てられ、母校愛と友愛と、自由の精神を体得したものは、創立八十周年の伝統をうけつぎ、さらに飛躍し、人生の真理に生きようとしつつあり、我々はこれを学問と体育の両面に見出すことができる。

我々ワンダーフォーゲル部に海外遠征研究会ができ母校の創立八十周年を記念し、まず台湾北部の大霸尖山を縦走して、海研の足がかりをつくつた。課題はこれからだ。部員諸君は大いに情熱を燃やし、研究し、己れの行かむとする所へ、早大ワンダーフォーゲルの旗をかざして進むがよい。諸君の前途は、世界に隠れない早稲田大学を背景として、また多くの友情に守られて、実に洋々としてひらけているのである。

もとより山岳部とワンゲル部との相違がある。我々は唯、わが道を進むのみだ。しかしながら、山岳部もワンゲル部も、学術探検部もその精神に変りなく、また危険を冒さないということ、即ち、安全に遂行される登山の基本には変りがない。

早稲田精神研究会では、今年二月から十カ月にわた

り、北米大陸を徒歩により横断して、ニューヨークにつき、ケネデイ大統領にもインタビューするスケジュールである。

青稲会は来年十周年を迎え、女子だけの隊でカナダのマウント・ロブソンに登る。

山岳部は世界各州大陸の最高峰を登る悲願をたて、エベレストにも登る運命にあり、その一つのあらわれとしてアラスカのマッキンレーがアタックされた。

しかしながらわがワンゲルにはワンゲルの行くべき道があるはずである。諸君はそれを虚心に考えねばならない。

私は今年三月で十カ年の実技講師のバトンを後継者にわたし、今年一年を休んで、来年から講義の面で母校の学生諸君と接つすることになろう。テーマは仮に「山とスポーツ」となつているが、その暁は実技講師の山本前監督と両々相俟つて、完全な授業を行うことが可能だと信じている。

私はまず授業の前提に早稲田精神をとき、主として一、二年を主体とする学生諸君と校歌を合唱することから初める考えである。

その暁は部の新人にも、私の授業の聴講を望むのである。

私は私がいつも説くように、母校愛のない学生が、如何に学び、また如何にスポーツに秀でていても、それは空しき、魂なき存在にすぎないと思うものである。

次に私は、今年は懸案の日本登山学校を開校することになるかもしれない。授業と実技を通じて一ケ年修業とし、研究科をおき、学校の助手となると共に、将来、学校の行う海外登山隊員に育成する考えである。又、交流登山も行う。

勿論、私は、早大ワンゲルの海外遠征にも参加したい。十年、苦楽を共にし、又、これから後にも、人生の哀歓を共にしようとする部との交流を、そのような形で現わしたい。それは自然な姿とも思う。

登山家とはロマンチストである。生物学講師の田辺和雄氏は、アフリカ赤道直下の月の山、ルウエンゾリの植物調査行の中途で客死された。登山を通じ、永年親交のあつた私は是非この月の山へ登りたい（本当は本物の月世界の山も、私のペーパープランにあるのだが）。

中共奥地に、戦時中、アメリカの輸送機が、高度計が九千メートルを示し、エベレストより高いと、その尨大な山容を発見して問題になつた中国語で積石山といわれる、アムネマチン峰も、私はひそかにマークし

た。

ジャングルの中を怪鳥の声をきき、アマゾン川を遡り、その秘峰を探るのも私の夢だつた。

しかしながら、秘境は外国の山ばかりにあるのでなく、また高きばかりにあるのでもない。

私はこの我々を生み育くんだ祖国日本の国土を愛しその清浄に心し、日本の山の美しさに味到しなければならない。寧ろ、海外よりこの方が大切な問題でありそれを忘れての海外遠征は空虚そのものと知るべきである。

しかしながら我々は、「成せば成る」という真理を知り、今日より明日へと前進し、新しき我とならなければならないのだ。

そして私は、早稲田の旗のもとに、そのようなところで世界的名校歌である「都の西北」を皆と合唱したい。

私はときたつてこの世を去るときも、私を囲んで皆に校歌を合唱してもらいたい。そして先輩の一人として、皆の胸の中に残りたい。

（筆者は実技講師）

遠征雑感

里見昭二郎

長いあいだの念願がかなつて、ようやく台湾に遠征隊を送りだすことができたが、神戸埠頭に一同を見送つたときの気持はまさに感慨無量であつた。ふりかえつてみると、こんどの遠征のことはどれもこれもが、貴重な経験となつた。始めてのプランでもあるしいろいろとうまくゆかなかつた点もあつたが、総じて成功したといえるのではないかと思う。

四月上旬に現役が台湾遠征プランを出したときは、あまりかんたんすぎて魅力にかけるという意見もかなりあつたが、いざ実際に手をかけてみるとあらゆる面にわたつて問題が錯綜しており、ほとんどお手あげのありさまになつたこともいくどがあつた。台湾遠征の経緯は大きくわけて前半の準備段階と、後半の実行および帰国後の部分とにわけられるが、問題は多く出発までの部分にみられた。しかもそれらの問題についても、事務局責任者としての私個人の不手際からでているものも少なからずあるように思われ、いまでは自分の至らなさを深く反省している。

どうしても記録しておかなければならない点にふれてみると、まず資金面のことがあげられる。どの遠征隊のはなしをきいても資金あつめには非常な苦労があり、その点この遠征も例外ではなかつた。こんどはスポンサーをつけないで独力で遠征するというたて前をとつたので、資金の大部分は隊員の自己負担によつてまかなわれることになつた。そして足りない分はO・Bに援助を仰ぐことになつたが、計画をあらかじめ周知徹底するということが充分でなかつたために、資金調達の面でなにかあと味の悪さをのこしたことも否定できない事実である。それにしてもO・Bの熱心な支持によつて予定額がほぼあつまつたことは感激にたえなかつた。とくに忘れることのできないのは、関西在住O・Bによつて示された厚意である。あのすばらしい心あたたまる歓迎ぶりは、隊員の胸に消えることのない想い出としてのこるにちがいない。会計面は主に山口君と吉良君とが担当したが、少くとも現地では体面を保つて行動することができたのも、山本隊長のすぐれた采配にくわえて、マネジヤーとしての両君のたくみな手腕に負うところが多いといえよう。

ついで遠征隊のメンバー構成についていうと、団長および隊員十一名が最終的に決つたのは九月に入つてからのことである。隊員については O・B五名、現役六名で、しかも女子三名もふくまれるという多彩な顔ぶれであつた。編成がこのように総花的になつたのも訪華親善ということが強調されたがためにほかならない。この遠征ではどちらかといえば現役側がイニシアテイヴをとつた形であつたが、これからの遠征隊では五～六名のパーテイでしかも若手O・Bを主力として構成してゆかなければ意欲的な遠征はむずかしいのではないかと思われる。

この遠征は大学創立八十周年を記念して行われたものであるが、W・V部についで軟式庭球部と野球部があいついで渡台し、それぞれ友好親善の成果をあげている。W・V部にとつてこの台湾遠征はいずれにしても画期的なものとなつたことは確かであり、これからの部活動にかなりの影響をもたらすものということから、遠征経験を十二分に活用して部の発展に役立たせたいと考えている。

末筆ながら、遠征のために終始援助をおしまなかつた関係者各位に、心から感謝の意を表したいと思います。

（筆者は現監督）

出発までのこと

山口　純一

今回の台湾遠征の御手伝いをして、海外遠征には、どんな条件が必要とされるかゞ分つた。

第一には優秀な隊長とパーテイ、第二に、プランの立案、遂行に全てを犠牲にして打ちこめる人間、第三に仲間のバックアップ、第四に冷静な事務局、第五に学校のネームバリユウとコネクシヨン、第六に資金、等々である。

だが、これらのうちでも今回の遠征計画にあずかつて最も力のあつたのは、木村を中心とする海外遠征研究係、及部の第一線のメンバーの熱意であつたろう。

彼等の「遠征をやろう！」と云う意気込みが何度も流産しかけたプランをその都度もち直させ、始めは尻込みしていたO・Bをも協力させる様に成つた原動力といえる。

私自身、この計画に参加し乍らも、大した力にもなれなかつた。しかし又、私なりにずい分色々な思い出もある。その内一番印象に残つているエピソードを述べようと思う。

プランが軌道に乗りだし、メンバーも資金もようやくめどがついた時、最大の難関が待ちかまえていた。

ヴイザと船便である。海外旅行に飛行機があたり前となつている現在、台湾に行く船は貨物船ばかり、その上一月に数える程しか便がなく、出航日は直前にならぬと決らないと云う状況だつた。

ヴイザについては、O・Bは休暇証明がないと渡航申請の書類が受け付けて貰えない。渡航許可が下りなければ船の切符が入手出来ず、従つて出発日が決まらない、というニワトリとタマゴの様になつてしまつた。

そうこうしているうちに現役の都合によつて決めた仮の出発予定日は一ヶ月後に迫つてしまつた。

ままよと思い十月二十八日の船をリザーブし、書類申請を行つた。　所が、二十日がすぎて二十五日になつてもヴイザが下りない。親善旅行でもあることだし台湾政府で政治的にすぐ許可して呉れるだろう位に軽く考えていたが、心配になつたので再三電報を打つがなしのツブテである。しびれを切らせて台湾山岳会に国際電話を入れると、向うでは申請書類が来るのを待つているとのことである。その申請書類はまだ東京の大使館にあつたのだ。

出発迄もう幾日も無い。木村と一諸に、ありとあらゆる可能性を考え、少しでも可能性のありそうな方法

に片はしから飛びついて見た。
曙光が見え始め、半日後にはそれが消えてしまう。こんなことが三、四回くり返された。欲しいのは時間だけだつた。
万策つき果てたと思つた時、船会社の馬沼O・Bから電話があり、出航日が二日にのびたからガンバレと云われた。再び元気を振るい起し、又新しい可能性を考えそしてそれにすがつて見る。しかし今日は三十一日、駄目は承知の上、明日の昼までに出航準備をとゝのえ、集つて貰うことにした。
木村はこの為、三日朝から晩迄大使館に行ききりである。明日は台湾に最後の電話を入れるという。
翌一日、二、三事情を知つている現役隊員から「大丈夫ですか。と心配そうな電話もかゝつて来る。
十時に浮田が一番乗りでやつて来た。制服制帽にスーツケースとザツクを持つ姿を見て、「ヴイザが下りないので一時中止」。と伝える時のつらさが実感となつて来た。しかもその可能性は七・八〇パーセントだつた。
十一時半、木村から電話。「山口さんですか」。「どうだ?」とあわてゝ聞き返すと、怒つた様な声で「出ました」。とポツンと答える。本気に出来ないので「ヴイザが出たのか?」。と当り前のことを聞き返すと、「本当です今判を押してます」と云われてやつと信じられ、同時に嬉しさがグーツとこみ上げて来た。
そこへ隊員がポツリポツリ集つて来た。
「出発だぞ出発だぞ」。皆に当り前のことを云つて廻つた。

（筆者はコーチ）

所感

福井正吉

日本に古くから〝言い当てる〟と言う諺があるがこのたびの台湾遠征は常日頃、せめて台湾にでも行きたいと語り合つていた部員の若い学生達が文字通り言い当てたのである。私が台湾遠征の話を聞いたのは七月半ばだつた丁度台湾から訪日友好登山隊が来ており、隊長の蘇梅耀氏はたまたま私とも近くしており、同氏の心からの温い支援で急速に実現の運びになつたのである。勿論、現役の努力ばかりでなくO・B諸君の献身的な力添えがあり、又学校当局が創立八十周年の記念事業の一環としてこの行事を取り上げ全面的に協力を惜しまなかつたと言う事がこの遠征を成功させたのである。

部が創立されて十有余年、国内における活動は相当実績を積み、ワンダーフォーゲル部も海を渡り外国の地に足跡を印したいと言う希望はO・B、現役を問わず関係者の総ての夢であつた。その一つが見事に成功したのであるから私としては大きな喜びを感ずると共に、今日までたゆまず努力を続けてこられた部の先輩諸君に衷心から敬意を表する次第である。ふりかえつてみると、一張りのテントもなく如何にしてこの活動を始めようかと安田平八君や山本稔君達と高田牧舎で語り合つた事を思うと誠に今昔の感に耐えないのである。

報告によると台湾遠征隊は現地に於て早大の先輩並びに各方面の予想外の歓迎と、高砂族の親身も及ばぬ協力により山の登山も無事故で成功した事は、日頃我々が心の守りとして来た、人と人との心の交流が実を結んだのだと信じている。努力なくして成功はあり得ない。台湾遠征は一ヶ月にも足りない短かい日数ではあつたが、ここに辿りつくまでには十年に余る努力があつた事を忘れてはならない。台湾遠征の夢が実現し喜びは大きいしかし海外遠征は緒についただけである。本当の活動は今から始まるのである。近き将来、もつともつと大きな、そして有意義な海外遠征の実現に向つて部の関係者一同、力を合せて休む事なく精進しなければならない。私は喜びにも増して、次の大きな発展を望んでやまない。

（筆者は顧問）

食べ物のこと

並木睦枝

晩秋の台北は雨が多い。低い軒からの雨だれをぬつてうまいものを探して食べ歩く楽しさ――このゴミゴミと薄暗い円公園にはいせいのいい呼び声と食べものの匂ひと湯気と雑多な人間の食欲が立ちこめている。円公園と云つてもいわゆる公園ではない。そこは食べもの屋が何十軒となく平らたくまるくなつて犇めき合つている所である。お察しの通り、あまりきれいな所ではない。隣り同士の区別もあるようなないようなたたきの上には粗末な木の卓と椅子、そこだけ特に明るいガラスの箱の中には動いている海老やカニ、豚の臓物から脳みそまで所狭しと並んでいる。丸裸の若鶏や鴨が並び、大鍋には何やらグツグツ煮えている。そうした間をぬつてフカのひれ、からすみ、海老、鶏、魚丸のスープなどと気の合つた同士で少しづつ食べ歩く楽しさ――。魚丸のスープは魚をくだいて団子にした

つみいれのやうなものが浮いている汁だか、海老の団子がゆだつてふわつとトキ色になつたのなどは格別で脂つこい料理の多い中でこのあつさりした味は忘れ難い。

今回はお招きを受けた席々で様ざまな中華料理を戴く機会に恵まれた。いわく広東料理、北京料理、上海料理、四川料理、汕頭料理、台湾料理等々。そこでは豚は毛と骨以外は全て非常においしく料理されていること、牛の四つの胃袋はそれぞれかなり異なること、鳩のおいしいこと、蛙もなかなかすてたものではないこと等々味の新知識を吸収するのに忙がしかつた。それにしても台湾の人の健啖ぶりはわれわれの比ではない。

ところで普段の食事で良いなと思つたものに朝のお粥がある。食べいいし第一お腹にもたれない。これには豚肉のでんぶ、瓜の味曾漬、落花生の塩ゆで、塩玉子などを添える。生玉子を多量の塩を混ぜた泥に埋めておくと半月から一ヶ月程で塩がしみ、味付のゆで玉子のやうになる。これが塩玉子で、たてに割つて大皿に並んだその鮮やかな黄味の色はいい。清水の楊先生のお宅では、嬉しいことに、田舎の料理を馳いた。肉丸、煮菓、おそば、甘い花花生の汁、艶やかな餡のどつさり入つたまんじゅう…。肉丸は掌ほどの丸く平らなぶよつとしたもので材料はサツマイモの粉（或は片栗粉）と米の粉。これを混だて水でとき、味付けした肉と葱のミジン切りを中に包んで一度蒸してから油で揚げる。小鉢に一つ、好みで唐がらしなど添えるが熱いのをふうふう云いながらついお代りをしてしまう。煮菓もやや同じやうなものでこれらが主食となる。うす暗い厨の石だたみの上には厚いがつしりした木の卓、火が勢いよく燃えているかまどの暖かさ――農家の家庭料理は主婦の熟練した手でつくられる。

また台湾と云うと欠かせないものに果物がある。街角の屋台店にこぼれそうに並んでいるバナナ、パインナップル、パパイヤ、オレンジ、ザボン、すいか、楊桃…この楊桃というのはちよつと酸つぱく、すもものような何ともさわやかな味で、切るとひとでのやうな星形をしている。バナナは台湾中部がその産地である。しかも畑は平地より山間部に多い。よく晴れた暑い日に台中から日月潭に向つた。バスで二時間近く、荒涼とした広い河原に出る。河上には山が高くかすみ、湖に向う山道の両側はずうつとバナナ畑だつた。

お礼の言葉

私達の遠征は、多くの収穫を得て、無事終了することが出来ました。

今、振返つて見ますと、遠征に至る道程は苦難の連続でありました。それらが尽く解決し、今日の喜びを得ることが出来ましたのもひとえに関係者の方々の強力な御支援によるものと思います。殊に私達を招聘して下さり、又、お力添え下さいました台湾省山岳協会を始めとし、台湾省体育会、早稲田大学台湾同学会、日本山岳協会の方々、私達の遠征を快く御理解下さり、製品を提供下さいました以下

東栄パン株式会社　大洋漁業株式会社　才一製薬株式会社
明治製菓株式会社　野崎産業株式会社　日絆株式会社
日本製紛株式会社　東京製鋼株式会社　東京田辺製薬株式会社
尾西食品株式会社　藤倉ゴム株式会社　小西六写真工業株式会社
SB食品株式会社　上島製作所株式会社　株式会社六和
キューピー食品株式会社　エバニュー株式会社　株式会社小川商店
永谷園株式会社　中野テント株式会社　東京芝浦電機株式会社
富士フィルム工業株式会社

の各社に紙上を借りて、深く感謝申し上げます。

又、終始私達ワンダーフォーゲル部を御支援下さいました早稲田大学外事課、及び早稲田大学体育局の方々に、深く感謝致します。

日付	摘要
四月七日	海研係にて、台湾研究決定
五月十六日	現役委員会にて、台湾遠征決定
六月十四日	OB理事会にて、台湾遠征承認
六月廿四日	OB総会にて、遠征について協力要請
七月三十日	夏合宿開始
八月十八日	夏合宿終了
九月五日	台湾同学会および台湾山岳協会に依頼状発送
九月十七日	山口、マニラへ出発
九月廿四日	台湾山岳協会より、招聘状到着
九月廿八日	山口、台北にて現地打合せの後（廿六日～廿八日）、帰国
十月六日	現役総会
十月八日	日銀へ外貨申請
十月十八日	大学理事会にて、遠征の件承認
十月廿一日	秋合宿開始
十月廿二日	大学創立八十周年記念日
十月廿三日	外務省より旅券交付
十月廿八日	秋合宿終了
十一月一日	大隈会館にて、壮行会
	中国大使館より、査証交付
	本隊、東京発
十一月二日	関西OBによる壮行会
十一月五日	本隊、神戸出港
十一月八日	団長羽田発
十一月九日	基隆上陸
	山岳協会、同学会歓迎パーティ
十一月十日	市政府、日本大使館、反共青年救国団、体育会訪問
十一月十一日	台北学苑訪問、南山廟

日付	摘要	
	山地班	平地班
十一月十二日	山地班出発	鳥来の高砂部落、瀑布、仙公廟を見物
	台北ー宜蘭ー松羅	
十一月十三日	松羅ー独立山ー南山	自由行動
十四日	南山ー南山コルーキャワン溪	荷物の整理
十五日	キャワン溪ー池有山ーシンタ	台中同学会、彰化商業銀行訪問
		彰化同学会、彰化県庁訪問
十六日	停滞、池有山	台中同学会歓迎会
		日月潭着、文武廟、化[illegible]社、
十七日	シンターバサラユンー次高溪	玄光寺見物
	上部	日月潭ー台中ー台南
十八日	大覇尖山ーイザワ山ー二六〇	台南同学会訪問
	○米地点	
十九日	二六〇〇米地点ーマダラ溪右俱	大貝湖見物、四重溪着
二十日	マダラ溪ー秀巒午前尾根	恒春、墾丁公園、[illegible]鼻岬
廿一日	秀巒ー田浦	四重溪ー台東ー花蓮
		花蓮郊外、アミ族部落訪問
		飛行機にて台北富田旅社
廿二日	田浦ー尖石ー新竹ー台北	台湾手工業センター見学
廿三日	台北ビール工場見学	
廿四日	台湾大学訪問、夜、理工系同学会パーテイー	
廿五日	全民運動会、北投 ―― 善光寺ー台北	
	夜、市長招待のパーテイー	
廿六日	団長、隊長、富井羽田着	
廿七日	台北ー台南ー高雄	
廿八日	高雄ー清水ー	
廿九日	龍井村、議会、教師会館見学、台北着	
三十日	自由行動	
十二月一日	自由行動	
二日	夜、山岳協会の方を招いて感謝パーテイー	
三日	台北ー基隆、基隆港出港	
七日	神戸入港	
八日	東京着	
十三日	遠征隊、帰国挨拶	
十五日	大学教職員食堂にて、帰国報告会	

編集後記

我部念願の台湾遠征も無事終了しました。

我々は今回の遠征で色々学ぶところがありましたが、それを一書にまとめ、同行の志や、将来の遠征の為の礎石とし、合せて我々に寄せられた諸氏の御厚意に答えたいと思います。

上乗の出来とは申せませんが、ここに遠征号を特集し、諸氏の御高覧に供し、なにほどかのお役に立つことが出来ましたら望外の喜びです。お気付きの点、御不審の個所がありましたらお知らせ下さい。

編集委員

佐々木　惇
南部紀一郎
春田光雄
浮田陽石
熊谷辰二
鈴木豊
米盛八束
友野彰二
宮寺悦子
藤崎武彦
吉原雅東
木原美恵子
樋田光香

発行日　昭和三十八年二月一日
発行者　早稲田大学ワンダーフォーゲル部
責任者　佐々木　惇
発行所　新宿区戸塚町一丁目　早大体育館内
印刷所　早大生協印刷部